

Title	新しく創られた現代的な祭りの社会心理的機能－ YOSAKOIソーラン祭りのケース・スタディー
Author(s)	和泉, 佳奈子
Citation	
Issue Date	2002-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/354
Rights	
Description	Supervisor:梅本 勝博, 知識科学研究科, 修士

目次

第1章 序論	1
1.1 本研究の社会背景と問題意識	1
1.2 YOSAKOIソーラン祭り	2
1.2.1 YOSAKOIソーラン祭りの歩み	2
1.2.2 YOSAKOIソーラン祭りの特徴	5
1.3 研究の目的	6
1.4 研究の方法	7
1.5 論文の構成	7
第2章 文献レビュー	8
2.1 はじめに	8
2.2 人間の欲求	8
2.2.1 欲求理論	8
2.2.2 欲求階層論	9
2.2.3 欲求と満足の関係	10
2.2.4 自己実現	10
2.2.5 自己実現者	11
2.2.6 高次欲求論	12
2.2.7 心理学的健康と良い社会	13
2.2.8 現代社会の欲求段階と動機付け	13
2.3 自我の認識	14
2.3.1 アイデンティティ	14
2.3.2 アイデンティティの確立と生きがい	15
2.3.3 アイデンティティと居場所	15
2.3.4 居場所の定義	15
2.3.5 居場所に関する研究	16
2.4 場	17
2.5 縁	17
2.5.1 縁の分類	17
2.5.2 選択縁の社会	18

2.6	祭り・イベント	19
2.6.1	日本人にとっての祭り	19
2.6.2	伝統的な祭り	19
2.6.3	現代的な祭り	20
2.6.4	現代的な祭りとイベント	21
2.6.5	メディアとしてのイベント	21
2.6.6	イベントに関する研究	22
2.7	YOSAKOI ソーラン祭りおよびよさこい祭り	24
2.7.1	YOSAKOI ソーラン祭り	24
2.7.2	YOSAKOI ソーラン祭りの成長	24
2.7.3	YOSAKOI ソーラン祭りの誕生	25
2.7.4	YOSAKOI ソーラン祭りへの批判的意見	26
2.7.5	よさこい祭り	26
2.7.6	よさこい祭りに関する研究	27
2.8	知識	27
2.9	おわりに	28

第3章 YOSAKOI ソーラン祭りの事例分析 29

3.1	はじめに	29
3.2	アンケート調査の概要	29
3.2.1	アンケート調査の目的	29
3.2.2	アンケート調査の対象	29
3.2.3	アンケート調査の方法	30
3.2.4	アンケート調査の分析手順と分析方法	30
3.3	YOSAKOI ソーラン祭りの機能	31
3.3.1	YOSAKOI ソーラン祭りに対する満足状態	31
3.3.2	YOSAKOI ソーラン祭りと踊り子の生きがい	33
3.4	踊り子と観客の違い	35
3.4.1	「居心地がよい」場所と「認められている」場所	35
3.4.2	居場所	38
3.4.3	参加動機	40
3.4.4	積極的に取り組んでいること	41
3.4.5	観客にとっての YOSAKOI ソーラン祭り	42
3.4.6	踊り子と観客の相違	43

3.5	居場所と YOSAKOI ソーラン祭り	45
3.5.1	「居場所」に関する二側面の満足状態	46
3.5.2	居場所の満足と YOSAKOI ソーラン祭りの満足	47
3.5.3	YOSAKOI ソーラン祭りが与えた満足	48
3.6	YOSAKOI ソーラン祭りからの卒業	49
3.6.1	満足した気持ちの変化の様子	49
3.6.2	所属年数と本祭直後の満足状況	50
3.6.3	所属年数と YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況	52
3.6.4	本祭後の満足と YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況	53
3.7	YOSAKOI ソーラン祭りが与える満足	55
3.8	おわりに	56
第4章	結論	58
4.1	はじめに	58
4.2	事例分析から得られたこと	58
4.2.1	「居場所」という視点	59
4.2.2	「居場所」ができるところ	59
4.2.3	踊り子の「居場所」と観客の「居場所」の違い	59
4.2.4	踊り子として「祭り」に参加するのはなぜか？	59
4.2.5	観客として「祭り」に参加するのはなぜか？	60
4.2.6	踊り子をやめるのはなぜか？	61
4.2.7	この祭りはどのような社会心理的機能をもっているか？	62
4.3	リサーチ・クエスチョンとその答え	63
4.4	理論的含意	64
4.5	実務的含意	65
4.6	将来への展望	67

参考文献

図表目次

図 1-1	YOSAKOI ソーラン祭りの観客動員数、踊り子数、経済効果の推移	3
図 1-2	YOSAKOI ソーラン祭りの伝播状況	6
図 3-1	踊り子の YOSAKOI ソーラン祭りに対する気持ちの大きさの変化	32
図 3-2	「居心地がよい」場所と「認められている」場所	36
図 3-3	踊り子の居場所	39
図 3-4	観客の居場所	39
図 3-5	踊り子と観客が「参加したいと思う理由」	40
図 3-6	踊り子と観客が「積極的に取り組んでいること」	41
図 3-7	参加したいかどうかの割合	42
図 3-8	観客が参加したくない理由	42
図 3-9	「居心地がよい」場所に対する満足状態	45
図 3-10	自分の価値を「認められている」場所に対する満足状態	46
図 3-11	チーム入り直後の満足度	48
図 3-12	本祭後の満足度	48
図 3-13	チーム入り直後と本祭後の満足状態の変化	50
図 3-14	チーム所属年数と本祭後の満足度	51
図 3-15	チーム所属年数の内訳	52
図 3-16	チーム所属年数と YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況	53
図 3-17	本祭後の満足状況と YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況	54
図 4-1	「居場所」の評価	64
表 3-1	「居心地がよい」場所の検定結果	37
表 3-2	「認められている」場所の検定結果	37
表 3-3	踊り子と観客が「参加したいと思う理由」の検定結果	41
表 3-4	「チーム入り直後」と「本祭後」の満足度の変化と YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況について	55

第1章 序論

1.1 本研究の社会背景と問題意識

一人の人間が関われる社会は、情報技術の発達により拡大し続けている。特にインターネットは、その「関わり可能な社会」を広げることに大きく貢献した。しかし、これほど多くの可能性を秘めた社会とは裏腹に、実際に人々が「関わっている社会」、すなわち自ら生活を営む「現実世界」での人と人の繋がりはどれほど拡大しているだろうか。むしろ、「実際に関わっている社会」の領域は、「関わり可能な社会」の拡大に伴い、相対的に減ってきてはいないだろうか。

情報社会の到来で、社会はより複雑になった。しかし一方で、人々はさまざまな技術を用いて社会の複雑さをうまく組織化し、効率的で機能的な社会を実現してきた。人と人とのコミュニケーション¹もその例外ではない。電話や FAX、そして電子メールは、空間的・時間的制約を超え、コミュニケーションの可能性を広げた。そして人々にとって、「関わり可能な社会」は徐々に拡大したのである。その反面、その機能的な社会の仕組みは、人と人が直に関わり合うコミュニケーションの必要性を薄れさせた。それは、主体的に社会と関わろうとしない限り、かえって「関わっている社会」を狭めることにもなりうることを意味する。つまり今の社会は、自分の意志さえあれば、「関わり可能な社会」を「関わっている社会」にすることができるが、皮肉にも、なんの意味もなく過ごしていると意図せずして「関わっている社会」を狭め、一人の世界に籠もることになりかねない危険をはらんでいるのである。なぜなら、現代の生活が、かつてのような地域的人間関係を抜きにしても成り立つと同時に、社会全体として個人主義を後押しするような風潮にあるからである。

かつて、人々は自分を取り巻く社会の一員として、社会とともに歩んできた。一個人は、家族の一員であり、地域の一員であり、会社に勤めれば会社の一員として、他人との絆を深め、その関係性の中での「個人」を確立して生きてきた。しかし今、人々は景気の低迷に象徴される様々な社会の混乱や、今までの価値観が崩れるような事件を目の当たりにして、自分にとって身近な社会や組織にさえ期待が持たなくなっている。その現状は、社会に頼るのではなく、自分だけを信じ「個人」として生きていこ

¹ コミュニケーションの概念を一概に定義することはできないが、ここでは、「人間関係が成立し、発展するためのメカニズム」を意味する（原岡 1990）。

うとする意識を植えつけ、自分を取り巻く社会とは距離を置いて生きていく姿勢をつくりあげた。確かに、今の社会は先程も述べたように「個人」として生きていくことを認め、それを可能とする社会である。しかし、このままでは「個人」が社会から孤立し孤独な存在となるのではないか。実際に、現代の若者達の間には「共通共有体験」が崩壊しつつあることが指摘されている（日高 1996）。つまり、現代の若者には生活を共有する、あるいは観念を共有する現実がなくなりつつあるのである。

ここで、この「個人」のみを重視した社会がもたらす弊害を一例あげよう。それは、個人と社会の間にできた溝によって、自分の思いや考えを社会に訴える経路を絶たれることである。自らの意思や思いを社会化できないことを中西（2000）は「知的内閉化」と言っているが、今のままでは、まさにそれが現実となる恐れがある。それは、自分の「思い」や「考え」という内に秘めた豊かな知的財産を、「知識」として世に出すことのないまま社会に埋もれさせてしまうことを意味する。なぜなら、様々な知識は、その諸形式を一定の集団の諸形態との関係のうちにおき、そこにおいてはじめて知識の諸形式が成立し形成されるからである（マンハイム 1973）。これだけ社会が発展して、情報が簡単に手に入り、一人ひとりの内側にたくさんの知的財産を蓄えたとしても、それが社会化されなければ、それは単なる自己満足で終わってしまうのである。

今こそ、個人であることを重視して生きようとしている人々に対し、彼らが関わりたいと思う主体的な参加の「場」²を設ける必要があるのではないだろうか。それは彼らもつ「知識」となりうる可能性をもった個人の知的財産を、社会に埋もれてさせてしまうことを防ぐことになる。そして、人々が主体的に自ら集う場を社会に創り出すことは、「知識創造」の始まりである「暗黙知の共有」を促し、社会における知識創造の土台作りとなるのではないだろうか。

1.2 YOSAKOI ソーラン祭り

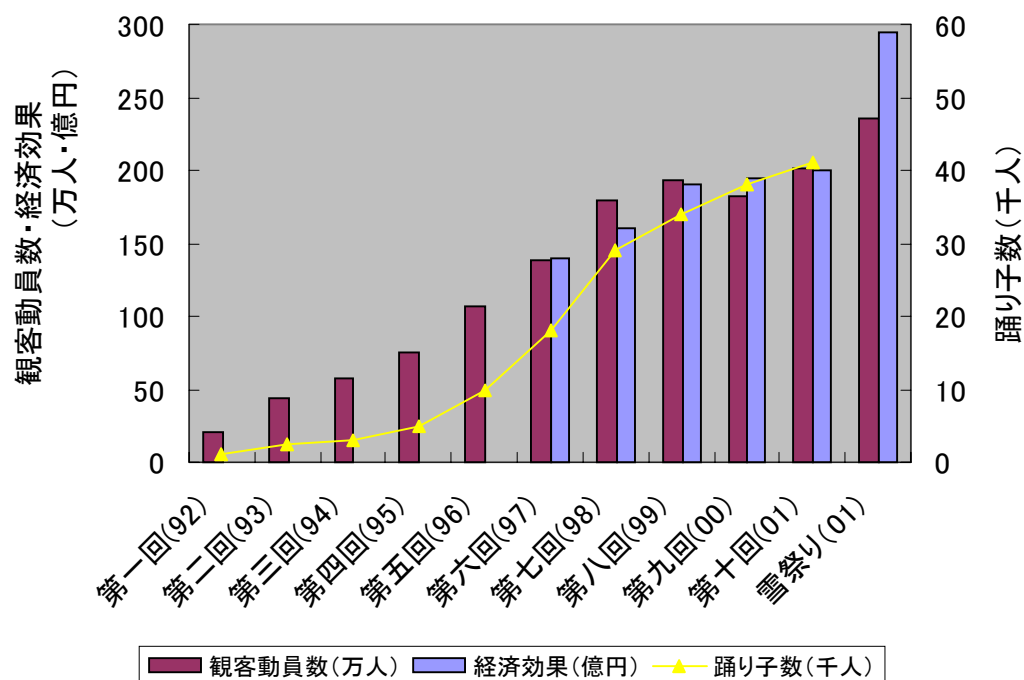
1.2.1 YOSAKOI ソーラン祭りの歩み

YOSAKOI ソーラン祭りは、今や北海道の初夏を彩る風物詩である。1992年に札幌で生まれ、昨年（平成 13 年）第 10 回を迎えた。祭りは 6 月 6 日～10 日の 5 日間行われ、踊りは大通り公園を中心に市内 33 会場で繰り広げられた。今年の祭りには、道内 188 市町村から 365 チーム（そのうち札幌 128）、道外 32 都道府県から 43 チームが参加した。初参加 86 チームを含む 408 チーム、参加人数は 4 万 1 千人と過去最大

² 「場」とは個人の「生活空間」である（レヴィン 1951）。本研究においては、この定義を「場」の意味とする。

規模の祭りとなった。第1回は10チーム1千人という小さな祭りであったが、わずか10年の間に急成長し、今年の観客動員数は201万3千人と過去最高を記録し、さっぽろ雪祭り(同234万人)と肩を並べる規模にまでなった。その経済的波及効果も206億4千5百万円(YOSAKOIソーラン祭り組織委員会の調べ)と過去最高を記録した(図1-1を参照)。

図1-1 YOSAKOIソーラン祭りの観客動員数、踊り子数、経済効果の推移



YOSAKOIソーラン公式ホームページ&北海道銀行調査ニュース2001.7より作成

事の起こりは、当時北海道大学の学生だった長谷川学氏(現在、組織委員会専務理事)が高知のよさこい祭りを見た時に覚えた、鳥肌が立つほどの大きな感動である。その感動は「是非札幌にもこのような祭りをつくりたい」という熱い思いになり、その思いの実現のために、100名以上の学生が集まり社会にぶつかっていった。そして高知県のよさこい祭りと北海道のソーラン節を融合させた現代的な祭り、YOSAKOIソーラン祭りが誕生したのである。

その後、祭りは興隆期を迎え、1996年には、チーム数が100を突破し、踊り子数も1万人を越え、観客動員数は100万人を突破した。この急成長に伴い、これだけの人を受け入れる会場をつくらなければならなかった。そこで地下鉄やJRとのタイアッ

プで「町は舞台だ！」をスローガンに、町全体を祭りの雰囲気一色にすることに成功したのである。この頃から、認知度は急激に高まり、YOSAKOI ソーラン祭りは道内でおなじみの祭りとなった。また、さっぽろ雪祭りでの演舞や、道内、国内はもとよりハワイなどでの海外公演で評価を得るチームも出現した。さらに、当初は4つの賞でスタートした表彰制度も、参加チームの増加にともない、1996年には11、1997年には18の賞を設定した。そのせいか、演舞の構成や踊り子のレベルアップも著しかった。だいたいこの頃に、今の祭りの隆盛を極める素地ができたと考えられる。それと同時に、各メディアに取り上げられはじめたのもこの時期だという。

そして、1998年あたりからYOSAKOI ソーラン祭りは成熟期を迎えた。チーム数、踊り子数、観客動員数は着実に伸びを見せてはいるが、その様子は穏やかなものとなってきた。そして、祭りは次第に質的に充実してきたのである。各チームは法被だけではなく、音楽、振り付け、地方車、鳴子、小道具等々、すべてに自分のチームのカラーを追求しはじめた。また「分科会」なるものが設けられ、これまでは事務局がつくっていた参加要項の作成に踊り子自らが加わるなど、運営側と参加側の意識は次第に接近しつつある。そして、これまでは集団参加がメインだった参加形態にも新風が吹き込んだ。それは昨年から設けられた「ワオドリソーラン」会場である。そこには、飛び入りの個人参加が認められたのである。そして今年も、2000人編成の大パレードを企画中であるという。このように、常に進化を遂げているのがYOSAKOI ソーラン祭りなのである。

また、この祭りの運営において、立ち上げ当初から貫く精神は、その資金源にある。この祭りは、寄付や補助金ではなく、「自主財源」ということにこだわっている。現在、運営資金の7割から8割を自主財源からまかなっているという。その背景には、「商標登録制度の活用」や「参加費の徴収」、「棧敷席の設置」などの取り組みが見られる。そして、当初20%だった助成金を、今や1.5%にまで削減することに成功したのである。ちなみに世の祭りの多くは3割から4割を補助金などに頼っている。つまり、YOSAKOI ソーラン祭りとは、自ら参加し、自らの力で「感動」を創るだけではなく、運営という点から見ても、自分たちで創り出すことを原則としている祭りなのである。

そして、彼らは、「やがては『リオのカーニバル』に匹敵する世界規模の祭りを目指しています」と言う。この祭りには、まだまだ十分なエネルギーが満ちあふれている。

1.2.1 YOSAKOI ソーラン祭りの特徴

2月のさっぽろ雪祭りが52回という伝統をもち、国際的にも知名度が高く、「見る」要素が強いのに対し、YOSAKOI ソーラン祭りは「参加する」要素が強いことが特徴である。そして、この祭りには、女性の参加と、地域や世代を越えた参加が目立っている（森 1999）。かつては特定地域の男性だけに限る傾向が強かった伝統的な祭りとは対照的である。また、参加形態の主流は「チーム」に所属しての団体参加である。その参加条件は、和製カスタネットのような「鳴子」をもって踊る、曲の一部にソーラン節を取り入れる、の二点である。そして本祭³では、予選、本選が行われ、最後まで選ばれたものが、祭りのファイナル・コンテストで踊りを披露する仕組みになっている。ちなみに、第10回の審査⁴のポイントは、「祭りを心から楽しみ、それを表現しているか」、「北海道らしさや地域独自のこだわりは見られるか」、「大胆な試みやユニークな挑戦をしているか」などである。これらの視点からも分かるように、YOSAKOI ソーラン祭りでは、踊りの技術よりもむしろ、踊りという表現方法から伝わる「チームの熱い心意気」がどれだけ見ているものの心を動かすか、が重要視されているのである。だから各チームは、自らのコンセプトを掲げ、それに基づき踊りを創り上げる。一つの踊りを創り上げることで、各チームの独創性を存分に発揮するのである。つまり、この祭りは、社会の多様性をそのまま受け入れる器をもった祭りなのである。

彼らの活動は、一年中行われることが多く、活動地域も札幌だけに収まらず、道内そして全国へと広がっている（図 1-2）。全国大会と銘打たなくとも、海外を含めて各地の祭りに、お互いのチームを出し合い交流を深めているのも大きな特徴である（森 1999）。そして他地域との交流も行いながら、地元チームは地元根付き、町を元気づけている。YOSAKOI ソーラン祭りが、確実にそこに暮らす人々の意識、伝統、文化の表現の場となり、しだいに無形の観光資源となったことで、地域の活性化に貢献していることもまちがいない。

³本研究において「本祭」とは、2001年6月6日から6月10日に札幌で行われた「第10回 YOSAKOI ソーラン祭り」を指す。一方で「YOSAKOI ソーラン祭り」は、本祭までの年間を通した活動一般も含めている。

⁴審査のために、二つの基本ルールとは別に、踊り子自身の運営参画によって作成されたルールがある。

図 1-2 YOSAKOI ソーラン祭りの伝播状況



出所: YOSAKOIソーラン公式ホームページ

(<http://www.tokeidai.co.jp/yosakoi/index2.html>)

1.3 研究の目的

本研究の目的は、人々の主体的な関わり合いが見られる「現代的な祭り」において、その主体的参加を促すような祭りの社会心理的機能を明らかにすることである。そして、その機能が「現代的な祭り」にしかないものなのかを検証する。そして、もしその機能が他のものでも代替しうる機能であれば、今後、人々の主体的な参加が求められる場を新たに創る際に、この研究からどのような示唆を与えることができるかを検討する。

そこで、メジャー・リサーチ・クエスチョンを「YOSAKOIソーラン祭りがもつ社会心理的機能とは何か」とし、それを明らかにするためのサブシディアリー・リサーチ・クエスチョンを、1) 踊り子として祭りに参加しているのはなぜか、2) 観客として祭りに参加しているのはなぜか、3) 踊り子をやめるのはなぜか、の3つとした。

1.4 研究の方法

本研究は、新しく創られた現代的な祭りのケース・スタディであり、具体的には 1992 年に札幌で誕生した「YOSAKOI ソーラン祭り」を取り上げた。

データの収集は、まず関係する書籍や新聞雑誌記事などのドキュメント・アナリシスを行った。次に 2000 年第 9 回 YOSAKOI ソーラン祭りに赴き、現地の様子を観察し、YOSAKOI ソーラン祭りに関する情報収集を行った。その後、YOSAKOI ソーラン祭りのもととなった高知市の「よさこい祭り」、そして YOSAKOI ソーラン祭りの流れを汲む石川県の「YOSAKOI ソーランのとまつり(現 YOSAKOI ソーラン日本海)」、名古屋市の「にっぽんど真ん中祭り」、仙台市の「みちのく YOSAKOI まつり」、そして YOSAKOI ソーラン祭りのチームが演舞を繰り広げた「さっぽろ雪まつり」を回った。各々の会場では、踊り子や運営側の方にインタビューして、様々な現場の情報を収集した。そして、2001 年第 10 回 YOSAKOI ソーラン祭りにおいてアンケート調査を実施し、踊り子 477 人と観客 406 人から回答を得た。踊り子に関しては郵送によるアンケート調査で、観客に関しては祭りの期間中に直接聞き取るアンケート調査である。その後も、石川県で行われた YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会専務理事の長谷川岳氏の講演会や、YOSAKOI ソーランのとまつり事務局での様々な活動に参加し、情報の収集にあたった。

これらの活動から得られたデータをもとに、YOSAKOI ソーラン祭りの魅力を客観的に分析することに努めた。

1.5 論文の構成

この論文の構成は次のとおりである。次章で、生きがい、欲求、自己実現、アイデンティティ、居場所、場、伝統的な祭り、現代的な祭り、イベント、YOSAKOI ソーラン祭り、よさこい祭り、縁、そして知識に関する文献レビューを行う。第 3 章では、YOSAKOI ソーラン祭りの事例分析を行い、YOSAKOI ソーラン祭りがもたらすものは、どんな欲求に対する満足なのか、祭りに踊り子として参加するものと観客として参加するものの違いは何か、踊り子がチームから脱退する原因は何かを明らかにした。そして第 4 章では、本研究による発見をリサーチ・クエスチョンに答える形でまとめ、さらに理論的含意と実務的含意を論じ、最後に将来研究への展望を述べる。

第2章 文献レビュー

2.1 はじめに

本章では、欲求階層論や自己実現といった「人間の欲求」、アイデンティティや居場所といった自我の認識、そして「場」、「イベント・祭り」、「YOSAKOIソーラン祭り・よさこい祭り」、「縁」、「知識」についての先行研究のレビューを行う。

2.2 人間の欲求

2.2.1 欲求理論

欲求とは、人間が内外の影響をうけて行動に駆り立てられる過程を表す言葉の一つで、行動を発言させる内的状態を指す。また、欲求には生命維持のために身体的生理的に欠くことのできない一次的欲求と、人が後天的に学習した二次的欲求がある。

まず、欲求の概念にもとづくものとしては、一般的な動機付け理論であるマズロー（1956）の「欲求階層論」と、労働場面の動機付け理論であるハースバーグ（1959）の「動機付け - 衛生理論」（二要因説）がある。次に動機にもとづくものとしては、困難な仕事や目標を達成しようとする「達成動機」に注目し、その測定や育成を重視したマクレランド（1961）の「達成動機理論」がある。

その中でも、特にマズローの欲求階層論が広く一般的だったので、本研究ではその理論を参考にした。そのように判断した理由¹は、この理論が人間を全体的、立体的にとらえていること、その欲求が人間の成長や発達のプロセスと関わりを持っていること、さらに欲求の段階が人間性の階層をも示していることなど、欲求の構造の中に発展過程やその発展への方法を含む点である。また、この理論はジェームスやデューイが提唱した機能論の伝統の流れにあり、またゲシュタルト心理学の全体論に融合するものであり、フロイトやユングなどの力動論とも融合するものであると考えられている²。

¹ 上田（1988）で述べられている欲求階層論の特質を参照。

² マズロー（1987）を参照。

2.2.2 欲求階層論

マズロー(1943)は、人間の欲求は五段階の階層をなしており、その欲求の段階は人間の発達の数度に伴って変化するという「欲求段階説」を提唱した。それによれば、下位の欲求の満足はすぐに他の(より高次の)欲求を出現させ、もともとの欲求よりも優位に立つ。またその欲求も満たされると、再び新しい(より高次の)欲求が出現するのである。だが欲求の段階は、発達とともに変化を遂げるとしても決して消滅するものではない。以下に欲求の五つの段階を記す。第一段階と第二段階は一次的欲求に相当し、第三段階から第五段階は二次的欲求に相当する。

第一段階 生理的欲求

生命維持のための根元的な欲求。

(食べ物、水、空気、睡眠、休息、排泄など)

第二段階 安全の欲求

生活のあらゆる面で内在的・主観的な不安を取り除き、安全を求めようとする欲求。

(安全、安定、保護、危険・苦しみからの自由、構造・秩序・法への依存など)

第三段階 所属と愛情の欲求

所属する集団や家族においての自分の位置を獲得し、帰属を確認しようとする欲求。

(相互の働きかけで育まれる、愛情、支持、好意、尊重、受容など)

第四段階 承認の欲求³

安定したしっかりした根拠をもつ自己に対する高い評価を獲得したいという欲求。

一方で、高い評価を獲得し得る人物になるため、自ら他人を越えようとする欲求。

(社会的な地位や権力など)

第五段階 自己実現の欲求

自分の力を最大限に発揮できることをやろうとし、また、自分になりうるものになりたいという欲求。

(自らの存在価値を高める⁴最前の自分を目指し、一段上の真・善・美を目指す)

欲求階層論において、特筆すべきこととして『人間性の心理学』の中でマズローは以下のことを述べている。その第一は、欲求の段階が低次であればあるほど、人格にとって強力で優先的であること。第二は、一欲求の満足が、更に高次の欲求の出現をもたらすのであるが、ただ特定の欲求が100パーセント満たされて、はじめて次の一段階の欲求に移行するのではない。第三として、特定の欲求が満たされると、更に高次

³ 第四段階の欲求は二重の意味を持つため時に他人から評価されずとも自らの評価で満足できる。

⁴ マズロー(1973)で、健全な自己実現者と超越的な自己実現者を参照。

の欲求が意識を支配し行動の動因となるが、それとともに満たされた欲求は漸次活動をやめ、ついには意識から消失、また行動に影響をあたえることもなくなるということ。第四に、欲求の階層が必ずしもこの五つの欲求に類別され、また階層順に配列されるとは限らないということ、という以上の四点である。

2.2.3 欲求と満足の関係

欲求不満とは、欲求が満たされないことであり、満足とは欲求不満の反対である(マズロー1987)。つまり、満足とは欲求が満たされたことを指す。

満足とは、満足を与えるものそれ自体のみが、欲求を満足させるのである。しかし、欲求は、満たされると、もはや欲求ではなくなる。満たされない欲求だけによって、有機体は支配され、行動が組織されるのである(マズロー1987)。

動機付け理論の中では、満足という概念は剥奪という概念と同じくらい重要な概念であることを意味している。つまり、満たされた欲求は、動機付け要因ではない。事実上、存在せず、消失したものとみなされるのである。

2.2.4 自己実現

「自己実現とは大まかに、才能、能力、可能性を十分に用い、また開発していること」(マズロー1987)である。しかし、マズローはこれに基づきもっと細かい定義⁵をしている。その定義でいくと、現実の人間には「自己実現」をしているといえるものはなかなかあてはまるものではない(山崎2000)。そこで、松田(1972)は、生涯発達の観点からしても、それぞれの年齢段階・発達段階にふさわしい自己実現があるとした。そして現在、様々な分野で自己実現の大切さが唱えられている。1980年代から、山崎(1999)は自己実現を達成することの必要性を発達の領域において唱え、またマーケティング、マネジメントの分野でも「自己実現」という概念は重要視されている。JMR生活総合研究所が行った首都圏にすむ15才から64才の男女を対象にした調査によれば「90年代の価値意識」を時系列で分析した結果、10年間で一貫して上昇しているのは「自己実現志向」であった。

実際、自己実現⁶という概念は「生きがい」にとって切っても切れない関係にある。神谷(1980)による「生きがい」の分類によれば、「生きがい」となるものの一つに

⁵ 自己実現の定義についてはマズロー(1971)p.224を参照。

⁶ ユングは意識と無意識とを含んだ心の全体性の中心を自己とした。自己は自我の存在を補償してより高次の統合性へと向かおうとする動きの主体であり、その自らの可能性を実現する過程を個性化の過程(individuation process)、あるいは自己実現と呼んでいる。

「自己実現の欲求を満たすもの」がある。長谷川(1999)は、スキナーのいう“happiness”は幸福一般の定義というより、具体的に“生きがい”を感じる状況について述べているとし、スキナーが提唱した“happiness”についての定義⁷を「生きがいは、好子⁸(こうし)を手に行っていることではなく、それが結果としてもらえたが故に行動することである」(長谷川1999)と定義した。

自分が持っている可能性を十分に発揮するには、外界と交流して自分の中に潜む能力を開花させ、現実へ何物かを付け加えるという創造が大切である。よって、自己実現の願望に目覚めた人は、外界に関わり外界を変化させることを通して、自分も何かを取り込みながら自分を変化させていく。そして、自己実現は、強い自我⁹なくしては起こらない。その強い自我が自ら無意識の世界に対して門戸を開き、自己との相互的な対決と協同を通じてこそ、自己実現が成し遂げられるのだ。こうして、人は自分を十分に生かすことで、本当の意味で「生きる」ことになる。

ゴールドシュタインは自己実現を、すべての有機体に存在する、個人に肯定、否定双方の影響を与えうる一つの基本的過程であるととらえた。すべての有機体は一つの根元的衝動をもっており、「有機体はこの世界において、その個的能力、その本性を可能な限り実現しようとする傾向に支配されている」(ゴールドシュタイン1939)。マズローもゴールドシュタインも自己実現、すなわちそれは究極的な欲求である。

2.2.5 自己実現者¹⁰

マズローは自己実現している人(成熟した、人間的により完全な人)は、既に基本的欲求を十分満たしており、いまやこれとは別の“高次動機”といわれるものに動機づけられていると述べている。この高次動機とは如何なるものであるのか。

人間には生まれ持って、真・善・美をはじめ、多くの普遍的な価値を求める傾向がある。それこそが、高次欲求の支配的な人格にとって、行動の明確な動機となって表れるのである。マズローはこの価値のことをB価値(Being 存在価値)としている。このB価値は各個人にとっても究極的な人生の目標となり、その価値の追求は欲求の中で最高の欲求段階を意味する。つまりこれらの価値的欲求が満たされたとき、人間は最高の段階まで自己実現を遂げるのである。

⁷ Happiness does not lie in the possession of positive reinforcers; it lies in behaving because positive reinforcers have then followed. [行動分析学研究、1990,5,p96.]

⁸ 好子：行動の直後に出現するとその行動の将来の生起頻度が増加するような刺激、出来事、条件。食べ物やお金のような具体的な“もの”ばかりでなく、音、加速度、完成、創作、社会的賞賛など、幅広い対象が好子になりうる。[杉山他(1998)の訳語より]

⁹ ユングの定義は、自我を個人の意識の統合の中心と考えるというものである。

¹⁰ マズロー(1986)の自己実現者の定義を参照。

2.2.6 高次欲求論

マズローは欲求の階層論を立体的な層構造と見るにあたって、欠乏動機と成長動機あるいはまた、欠乏欲求と成長欲求という形で論じている。マズローは、人生をより一層豊かに生きようとする欲求を成長動機と呼んでいる。社会的に立身出世することとか、経済的に金持ちになるとかが重要なのではなくて、何よりも自己を楽しく実現するかどうかということが自尊心を維持する欲求につながっているのだ。自己実現を行わなかった人は、深刻な生きがいの喪失状態にあるであろう。大きな目的に身を投じて、我を忘れてそれに打ち込むことによって知らないうちに自分のうちにある能力を最大限に発揮することが生きがいにつながっている。

生理的欲求、安全の欲求、所属と愛情の欲求、承認の欲求等の区分はそれぞれ質的な相違を示すものではなく、実は相互に密接な関係を持ち、階層で分けるにはあまりにも同質的な特徴を持つとしている。

これに対し、欠乏動機と成長動機という分類は、明らかに異なった欲求構造をもっている。欠乏動機は、人格内で精神的・身体的に欠乏状態が生じ、これを外界の資源によって補おうとする働きを意味し、一方、成長動機は、人格に充実したエネルギーを外の対象に向け、成長へのステップに使用という働きを意味する動機であり、すでにそこには人格に対する捉え方からして異なっているのである。

そこで、欲求階層論と高次欲求論を大まかに照らし合わせると、第五段階の自己実現の欲求のみが高次の成長動機の特徴を表し、それ以外は欠乏欲求とされる。

欠乏動機と成長動機の相違は5つあげることができる¹¹。第一に、衝動面について、欠乏動機が衝動を否定するのに対し、成長動機の場合は衝動を肯定する立場に立つ。第二に、満足の結果について、欠乏動機の場合は一応の緊張状態で終わるが、成長動機の場合は満足はますますその衝動を高めるかたちをとる。第三に、自我の意識に関して欠乏動機の場合は、自己の欲求満足を中心にこれと関わりを持つ範囲の事柄に関心が持たれるが、成長動機については、自己の利害とは関係なくもっぱら外界の事実をありのままにとらえ、しかもその課題に傾倒することができる。第四に、環境との関係に関して、欠乏動機の場合は環境依存の立場をとらざるをえないが、成長動機においては環境から独立した行動をとることができる。第五に、欠乏動機の人格は、欠乏動機の満足を達成する手段として学ぶか、成長動機の人格においては、学習は洞察、発見、創造の意味を持つ。

¹¹ マズロー（1973）を参照。

2.2.7 心理学的健康と良い社会

マズローによれば欲求の満足は、とくに精神の健康性を極めて密接な関係に立ち、欲求不満が健康な人格形成の土台を築くものであることを指摘している。また、欲求が次第に欲求の階層の上層で満足されるにつれて、その人格の健康の段階も向上することも明らかにしている。つまり、このような心理学的構造は、欲求満足が自己実現あるいは精神的健康をあらわすものであり、各段階で欲求が満たされて消滅することが、すなわち、その段階の健康度を示す指標であることを意味している。人が人生に何を欲するかと問うとき、それは人の本質そのものを扱うことになる(マズロー1987)。

そして、欲求の階層において最終的に目指される“自己実現の欲求”を満たした人は、マズローに言わせると、心理学的にとても健康¹²な状態といえる。しかし世の中には健康な人ばかりとは言えないであろう。したがって、社会の中に不健康、つまり病気の人がいるとしたら、それは真正面から取り組むべき課題であろう。

そこで、マズローは良い健全な社会とは、人の全ての基本的欲求を満たすことにより最高の目的の出現を可能にするものであると定義した。そして、好ましい社会とは、社会を構成する人間が健康で自己実現する人間となるべき最大の可能性を与えてくれる社会であるとはっきり定義している。この両者は、心理学的には同様の意味ではある。またこの定義から推し量ると、好ましくない社会とは心理学的に病んだ社会ということになる。

2.2.8 現代社会の欲求段階と動機付け

マズローは「欲求の階層論」を展開し、人々の欲求は、より低次の欲求が満たされてはじめて、それより高次の欲求が生じ、さらに後者を満たすような動機付けが生じるのだ、と論じた。このマズローの指摘は、全て何らかの欠乏状態を満たす欲求であったという意味で欠乏動機を指している。

しかし、今田(1989)はこの説を発展させ、最高次の自己実現欲求の次にくるものは「いかに個性的な自己を実現するか」という「差異動機」であると指摘した。これは欠乏を充足する達成性の目標の達成が社会的に重視される時代から、目標充足行為そのものの中に「意味」を見出し、その質を問う、コンサマトリーな目標に社会的な優先順位を与える社会へという変化が生じていることを意味する(池田,村田 1991)。コ

¹² マズローは健康と不健康の考え方について以下のような見解を示している。健康な人とは、何よりも自分の可能性や能力を最大限に発達させ実現したいという欲求により動機づけられている人のことである。反対に、ある人がそれ以外にもっと根強い基本的欲求を持っているとしたら、その人は不健康であるといえる。不健康、つまり病気なのである(マズロー1987)。

ンサマトリー性の目標とは、あることを体験すること、あることを行うプロセスそれ自体が目標になる類の目標、すなわちプロダクト志向ではなく、プロセス志向という特徴を持った目標である。に基づく動機付けは、人生のあらゆる側面に、達成性の動機付けと共存している。

2.3 自我の認識

2.3.1 アイデンティティ

アイデンティティ¹³理論の提唱者は、E.H.エリクソンである。アイデンティティとは、「自分とは何者か」「本当の正真正銘の自分とは何か」を意味するのが一般的である。鑑(1990)によると、アイデンティティとは歴史と時代の中で揺れ動く自分の存在意識であり、遠藤(1981)は、アイデンティティを自我同一性であるとした。従来は、社会の中での役割にある程度のパターンがあり、そのモデルに自分を近づけていく過程の中で人々はアイデンティティを確立¹⁴した。しかし次第に、現代社会において自分が近づきたいと思う対象となるモデルは多様化し、またそれぞれのモデルも複雑になったため、モデルに近づくのに時間がかかるようになった。ところが今や、社会も変化をし続け、モデルというのもはや存在しなくなりつつある。その中で自分は社会とどのような関係を持てばいいのか早く決めろといわれても、なかなか決められるものではないのかもしれない。自分と他者、自分と社会の関係において、しっかりとした自分の位置と調和が保てるかどうか、アイデンティティの獲得における重要な課題であると、エリクソンも指摘している。

しかしながら、決められないからといって、それで済むわけではない。ここで、人は焦り、「自分探し」の旅にでるのだろう。しかも現代のような常に変化する社会の中では、一度自己が確立されたからといって安心できるわけではない。岡本(1997)は、人と人の関わりによって発達していく自己の確認作業は、常に社会との位置関係を確認めながら行わなくてはならず、特に中高年以降の人生においてとりわけその重みを増してくると述べている。また、田中(2001)も、従来ならば自分がある程度の方向性を決めた後は、社会の状況や自分との関係などあまり考えなくてもよかったのだが、今は関係性の確認作業が必要であると指摘している。またそうしないと人々は不安に陥ると記し、それは逆に関係性が確認できれば安心するわけである。

¹³ 細見(1999) アイデンティティの定義を参照。

¹⁴ 遠藤(1981) アイデンティティの確立の定義を参照。

2.3.2 アイデンティティの確立と生きがい

生きがいとアイデンティティの確立にも深い関係がある。砂田(1979)による調査では、同一性混乱が高いものほど、生きがい感(神谷1980)が低いという結果が出ている。つまり、青年期にアイデンティティを確立していく過程において、生きがいが必要であるということがいえる。さらに、大野(1986)が実施した「一年間ボランティア計画」¹⁵参加者調査では、自己成長の高まりと社会の中での役割を得たという感覚の高まりに相関関係が見られている。このことから、経験や出会いによって生きがい感を得ることが青年の意識を変え、アイデンティティの形成を促したということが言える。

また、エヴァンズ(1981)の『エリクソンは語る』によると、一般的に青年期にアイデンティティを確立し、成人期に親密な自己の成熟を遂げた人は、マズローの欲求階層論の第四段階：承認の欲求までの欠乏動機を満たし、第五段階：自己実現の段階に入る。逆にその段階まで達していないと自己実現以降の欲求は出にくい。さらに自己実現の欲求段階にいる人にとっては、欠乏欲求がいくら満たされたとしても、何か満たされない思いが残ると述べている。続けて、広義には人類の発展に貢献するという世代性の自覚が持てない限り、自己実現という欲求は満たされないと記している。これは同書において、中年期の自己の内面的欲求を世代性と停滞という視点から考察した時に、マズローの欲求階層論を参考にした見解である。

2.3.3 アイデンティティと居場所

アイデンティティ研究は、人間における様々な側面からなされている。その一つとして「居場所」という側面がある。ここで言う「居場所」とは、例えば「大学に居場所がない」や「家庭に居場所がある」で使われる時の意味と同義である。つまり、「居場所」とは、生きている人間の側面を指しているのだ。

小沢(2000)は、エリクソンの記述から以下のことを指摘した。第一点は、居場所というものは、自分の可能性を実現して、それを他者に認めてもらうことまたは認めさせることによって得られるものである。第二点は、居場所を得ることによって、アイデンティティの感覚を持つことができる、ということである。

2.3.4 居場所の定義

¹⁵ この事業は(社)日本青年奉仕協会が実施しているもので、18~30才の青年が1年間職場や学校を離れて社会的活動を行うことに対しその活動先を紹介し生活費を補助するプログラムである。

居場所という言葉は、学問的に扱われる前から、日本語にもともとあり、日常生活を営む上でも、意識することが多いなじみの深い言葉である。それが、1980年代の後半から「居場所」は、ある種の響きをもって使われだした。そして、1990年代になると、文部省の政策文書や学会などでも使われるようになった。自分の部屋、つまり“子供部屋”という占有空間が与えられることが普通となった現代生活において、自分の居場所のことが問題となるのは皮肉な話である。しかし、このことだけでも居場所は単なる物理的空間を示すものではないことが分かるだろう。しかし、居場所についての定義は定まっていない。

三本松(2001)は、居場所とは、われわれが生活を営む上での意味付与と関わる「場」であるとし、その「場」には空間性と社会性があると言っている。同様に、佐々木(2001)は「居場所は必ずしも物理的空間を意味するものではなくむしろ心情的に安心できる空間という意味の方が強い。」と説明し、「情報空間」という現実の場所ではない空間ですら、それが自己拡張しやすいために自分自身を肯定的に確認することができる居場所となりうる、と述べている。高塚(2001)によれば、居場所とは「空間的な“居”場所と時間的な“居”場所がクロスするところ」に存在するものであり、それは社会的な関係性によって意味づけられるものである。また、萩原(2001)は居場所について以下のように説明している。居場所は“自分”という存在とともにある。居場所は自分と他者との相互関係という関わりにおいて生まれる。居場所は生きられた身体としての自分が、他者・事柄・物へと相互浸透的に伸び広がっていくことで生まれる。同時にそれは世界(他者・事柄・物)の中でのポジションの獲得であるとともに、人生の方向性を生む。それらどれも同じ趣旨のことを言っていることが分かる。すなわち、居場所は他者との関わりの中で自分の位置と将来の方向性を確認できる場を意味する。1990年代のはやり言葉でいえば、居場所は「自分探し」の場であるということもできる。その「自分探し」には「社会の中で自分がどういった役割を演じるべきなのか」といった、社会と自分の関係性の問題が含まれている。鑓(1990)は、人間が社会生活全般の中で他人と交わることは、自分を発見し、自分を確立していくための道程であると言っている。

2.3.5 居場所に関する研究

小沢(2000)は、居場所という視点からアイデンティティ研究を行い、居場所を本人と他者と対象というトライアングルで捕らえ、居場所の概念化を試みている。

また、「居場所をつくる」ことについての研究もなされている。西村(2001)は、「居場所」という視点を教育の現場に取り入れることの重要性を唱えている。また三本松(2000)は、福祉コミュニティの再生という視点で居場所を研究し、人々が社会で孤

立することのない福祉社会を創るために、社会に開かれた居場所をつくる時の条件を提示している。しかし、どれも学問的な論述の下、一方的に「居場所」の大切さを主張するだけで、実際に社会で生活している人の視点に立った「居場所」の研究はなされていない。

2.4 場

『場』の定義については、心理学、社会学、物理学、経営学など、様々な分野で取り扱われている。

社会科学における「場」の理論を展開したレビン（1951）は、個人の心理学を取り扱うために「『場』は個人の『生活空間』である」と定義した。その生活空間とは、人とその人にとって現存する心理学的環境とから成っているものである。本研究も人間の心理状態を取り扱っていることから、レビンの「場」の定義を用いた。

また、物理学の「場」を社会システム学にとりいれた飯尾（1999）は、「『場』は、その社会システムにおいて社会で何らかの相互作用によって形成され、何らかの形で『その社会システムのもつルール』 = 『社会規範』としてその社会メンバーによって承認され、すなわち社会的サンクションをうけているもので各人の相互作用の構造的枠組みとなるルールの集合と、そのもとでの相互作用から生まれる条件の総体である」としている。

そして場のコンセプトを経営組織にとりいれた牧野（1999）は、「場」とは自己組織化経営を進めるうえでのキーワードであるとし、色々な側面から「場」の特性、機能、内容、生成についてまとめている。

2.5 縁

2.5.1 縁の分類

かつてのような拘束的・包括的な血縁・地縁関係が解体し、もっと人為的で部分的な人間関係が表れたことに対して、社会学者は“ゲマインシャフト”に対して“ゲゼルシャフト”、“コミュニティー”に対して“アソシエーション”という概念を与えた。そこで、米山俊直がそれらの言葉に対応するものとして“社縁”と命名した。社とは会社や結社の社である。従って、社縁とは血縁・地縁を除くすべての人間関係を指す名称となる。

しかし、血縁・地縁の領域が縮小し、それ以外の人間関係の領域が大幅に拡大した今日、それらすべてを社縁という言葉で一くくりにするには無理があった。そのため

次第に社縁という概念は、血縁・地縁以外のありとあらゆる人間関係を放り込むカテゴリーのゴミ捨て場所のようになってしまった。

その状況を解決するため、望月（1977）は、血縁・地縁・社縁のいずれにも還元されない人間関係を“知縁”もしくは“値縁”と名付けた。血縁や地縁の持つ外圧的必然性ではなく、都市コミュニティの開いた系の関わりに注目したもので、個人の“価値”によってつながっていることから“値縁”という考えが生まれた。ところが次第に、企業や結社に帰属することを好まない自由人の兆しが見え隠れしてきた。そこで“認知”する情報によって結ばれる、極めて離合集散の自由度の高い“知縁”という考えが生まれたのだ。

一方、この知縁の考え方に触発されて、上野（1994）がたどり着いたのは“選択縁”という概念である。この造語の背景には、互いに相手を選び合い、多元的な人間関係の領域が広がってきたという観察があった。

2.5.2 選択縁の社会

上野（1994）の『近代家族の成立と終焉』から、“選択縁”の特徴をまとめると、第一に自由で開放的な関係であること。選択縁は、選び合う縁であるから原則として加入脱退が自由で拘束性がない。つまり脱退しても不利益を被らない。第二に、メディア媒介型の性格であること。例えば、深夜ラジオの聴衆同士のように対面接触がなくとも生じる関係のことである。第三に、過社会化された役割からの逸脱ということがある。もともと縁のない世界では、脱役割や変身が可能であり、また演技や遊びが成り立つのもこの空間である。このような特徴を持つ選択縁とは、すべて定型化された役割の集合の残余カテゴリーである。だとすれば、選択縁の社会こそ、個人に個人としてのアイデンティティを供給する基盤なのである。

また、選択縁の社会の成立が果たす社会的な機能をあげる。梅棹（1981）は「選択縁の社会は、実利実益に関係のない社会的ニッチ¹⁶をたくさん作り出すことを通じて、過密社会の中の競争を回避し、安定したアイデンティティの保証となる。」と述べている。産業社会的な価値が一元化して、地位が矮小化すればするほど、このニッチを通じての棲み分けは、サラリーマン社会の平和共存の知恵であろうと、上野（1994）は記している。

一方で、選択縁の弱点は、簡単に成り立つ関係であるからに、集団としても不安定で、安定したアイデンティティの供給源ともなりにくい可能性があることであろう。

¹⁶ ニッチ(niche)とは、「くぼみ、適所。商売上割り込めるところ。シェアが持てる部門」(『現代用語の基礎知識 2001』より)。

2.6 祭り・イベント

2.6.1 日本人にとっての祭り

今、日本に存在する“祭り”と呼ばれているものには、伝統的な祭りもあれば、伝統的な祭りがかたちを変えて観光化したもの、また、新しく創り出された伝統¹⁷としての祭り（都市の祭り、地域の祭り、商業的な祭り等）、音楽祭、さらにフェスティバルと呼ばれるものがある。また単なる大売り出しでさえ「・・・祭り」となっている。日本人は、これほどまでに“祭り”好きなのである。日本人にとって祭りとは、その定義よりも前に、最も身近で、親しみ続けてきた娯楽であると言えるだろう¹⁸。

一言に娯楽といっても、祭りの場合はその楽しみ方が人によって千差万別である。もちろん、祭りを執行する人々にとっての祭りであることは今も昔も変わらない。ところが戦後社会は急速に発展し、各地の祭りが世に知られるようになると、そこに遠方からわざわざ祭りを見に来る見物人が登場し、近年では祭りに飛び入り参加する人々の存在も無視できなくなっている。その他にカメラマンの存在も目立つ。彼らは結果的に祭りを記録してくれているのだ。つまり、祭りは多くの人々が関わり合って創られていくのだ。真野（2001）は「祭りはどのような意味あいにおいても現にその時を生きているもの、その社会に生きているものによって行われる行為である。」と述べている。いずれにせよ、人々の心に感動を与え、文化の担い手になるものとして祭りに勝るイベント¹⁹はなかなかない。

2.6.2 伝統的な祭り

祭りとは、本来信仰とともにあった。現存する神事祭礼はもちろんだが、伝統的な祭りならその根元には必ず神事的要素や仏教的要素があったはずである。神楽や舞楽などは神事の伝統的な芸能であり、神に奉納するという意味で演じられたのである。つまり、心霊を慰めるための芸能であり、これを神事芸能という。また獅子舞いや念仏踊りは仏事芸能と呼ばれている。しかし時代の流れとともに、これらの芸能は神や仏から離れ、独立して演じられるようになった。日常の「ケ」の状態から「ハレ」の状態に移行する際の様々な儀式は宗教儀式そのものである。

「ハレ」とは晴れやかなことであり、日常の生活を忘れ、人間の本質的なものを精一杯謳歌するもので、これが祭りである。そして再び「ハレ」から「ケ」に戻ると、

¹⁷ ホブズボウム（1992）を参照。

¹⁸ 人間とはたぶん祭りをしたがる生き物にちがいない（真野 2001）。

¹⁹ イベントという言葉の本質は“偶然性”と“ハプニング性”である（ホール 1992）。

秩序もまた戻り、あらたな活力が生まれてくる。

このように祭りには必ず「儀式」と「あそび」の二面性がある。祭りの時期も本来は時節の節目に行われるのが習わしであり、いわゆる「蘇生」という大きな意味をもっている。簡単に言うならば、祭りを通じて新しいエネルギーを体内に蓄え、明日からの労働にいそしむ、その転機が祭りという「ハレ」の世界である。

祭りに触れる人間は、過去の人でもなければ、未来の人でもない。その時代時代に生きる生身の人間である。したがって祭りはいつも部分的にしる「蘇生し続けている」ことが重要である。またそうさせていく努力をしてこそ、それぞれの時代に即応した、「生きた祭り」として共感も感動も与えるものなのである。

2.6.3 現代的な祭り²⁰

人々は戦後、それまでの貧しい暮らしのうっぷんを祭りにぶつけて気持ちのバランスをとり、その後、高度経済成長期に入るにしたがって経済指向に傾きだしたのである²¹。次第に若者は都会へと移住し、地域に残るのはお年寄りと子供たちという異常な社会現象が起き、祭りどころではなくなったのである。更に、信仰心が年々薄れていく中で、伝統的な祭りの形式主義は受け入れられなくなった。神事という形式を踏襲するあまり、各地で祭りの本来の心が失われ、祭りの形骸化が進んだ。つまり、祭りは経済成長とともにその魅力を失ったのである。二瓶（1986）は、当時の人々の心を「心より金だ」と思っていたきらいは多分にあると指摘している。しかし、昭和50年代（1970年後半～）の安定経済成長期にはいると、経済的な豊かさだけに疑問を持ち始め、今度は心の豊かさを求めるようになった。「祭りをもう一度」という風潮がある一方で、神事は相変わらず形骸化したまま、もしくは姿を消していた。

そして、人々は神事的な祭りは制約がありすぎていやなので、いっそのこと新しい祭りをと、祭りのなんたるかも知らずに闇雲に取り組んだのだろう。その結果、現代的な祭りとして祭礼圏という枠組みを越え、地域住民なり、一般人なりの広がりを持たせた自由な参加と、それを見に訪れる見物人の存在を無視できない新しい祭りが続々誕生した。しかし、その内容はお粗末なもので、毎年毎年変わったりして、何が祭りの核なのかが分からないようなものが多かった。そのような状況に対し、二瓶（1986）は、現代の祭りには形はあっても“まつりの心”を忘れているきらいがあると指摘し、「祭りだ祭りだと騒ぐ前に、なぜ今祭りなんだ。祭りとはいったい何なのだと考えて欲しい。このあたりをなおざりにしてたとえ新しい祭りを創り出しても、決して地域の発展に寄与するわけでもなければ、世間の注目を浴びるわけでもない。」

²⁰ 本研究では、戦後誕生した祭りのことを「現代的な祭り」としている。

²¹ 二瓶（1986）を参照。

と指摘した。さらに、「これは祭りに限ったことではなく、むらおこしやまちづくりなどの運動にも同じことが言えるのではないだろうか。」と付け加えた。

2.6.4 現代的な祭りとイベント

現在「祭り」の多くは「イベント」と化している。一方で、私たちは「イベント」として数多くの「祭り」を創り出してきた²²。このように一般的に「祭り」という言葉と「イベント」という言葉はほぼ同義で使われている。特に現代的な祭りに関しては、多くの場合イベントともいえる²³。実際、「祭り」と「イベント」の定義に関して統一した見解はない。そこで、祭りとイベントの定義についての様々な見解を以下に記す。

二瓶（1986）は、イベントとは何かを仕掛ければよいというものではなく、そこに必ず人間というものが介在するものだとしている。ちなみに、その考えでいくと展示会、展覧会、花火大会等の類は、人間が介在しないのでイベントではなくディスプレイと分類される。この考えでいくと、祭りは全てイベントであるといえる。また、鶴見（1988）は、伝統的な部分と新しく設計した部分の多い少ないのバランスで、イベントと祭りのいずれであるかを判断している。この場合、伝統的な部分が多い方が祭りだとされている。また、森田（1990）はイベントが時を経て熟成し、参加者がそれを通して自己のアイデンティティを確認することができたとき初めて、イベントは祭りになるとした。その祭りの特性として、周期性、共同関与性、日常性からの離脱を示している。そして小松（1997）はイベントと祭りの違いは、神の祭祀の有無であるとしている。神の存在があれば祭りということである。そして最後に、芦田（2001）は祭りの特性の一部が欠けたものがイベントであるとし、祭りの特性として聖中心性、非日常性、儀礼性、祝祭性、儀礼性、共同性、周期性、催事性をあげている。

2.6.5 メディアとしてのイベント

糸口（1983）はイベントを第三のメディアであると記している。ちなみに第一のメディアは印刷、第二のメディアは電波である。また、二瓶（1986）もイベントをコミュニケーション・メディアとしている。さらに『イベント白書'93』でも、イベントは様々な価値観をうまくコミュニケーションする手段として、国際間の壁を越えるコモン・ランゲージであり、コミュニケーションであると位置づけている。また『イベント白書 2000』では、イベントは楽しさを伝えるコミュニケーションであるとしている。

²² 2.4.6 を参照。

²³ 文化人類学者の森田（1999）は、現代のお祭りについて「イベント＝祭り」と表現している。

つまり、ほとんど例外なく、イベントは「メディア」として認識されている。

2.6.6 イベントに関する研究

1980年代後半、全国津々浦々で“むらおこし”“地域づくり”運動がさかんになる。こうした運動のもと、祭りづくりや地域博などに見られるように、イベントを通じて新しいコミュニティーづくりをし、地域に活力をもたらし、いこうとする動きが活発化してきた。ところが始めの頃は、“イベント”という流行言葉のムードに流され、何かやらねばと無作為に取り組んでいる地域が多かった。そのため一過性の活性化は可能なのだが、真に地域がよみがえることにはならないことが多かった。

糸川(1983)や二瓶(1986)は、イベントの失敗例の原因を探り、成功するイベントとはどのような手順を踏んでいるのかをまとめている。糸川(1983)は『イベント企画入門』において、“モノの豊かさ”から“心の豊かさ”への充足時代に求められているものこそ、イベントにおけるコミュニケーションであるとし、活気のある生活環境をつくるために、イベントを行政や大企業だけの占有物にせず、中小企業経営や、労働組合や地域の市民団体においても、商売や活動の中にも取り入れていく姿勢を具体的に示し、実際にイベント進行に使われるシナリオも掲載している。また、二瓶(1986)は、新しくイベントをするときの第一歩として取り組むべきことは、成熟した社会において人々が求めているものや、人々の心の今後の動向を探ることであると記している²⁴。その上で、人間の情感を大切にしたいソフト性の高い産業の重要性を唱え、その際たるものとしてイベント産業を重要視している。さらに、その土台を踏まえた上で「イベントと名が付けられるからには、創造的でなければならないのは言うまでもないが、もし創造的ならば、そこに必ず企画というものが最優先するはずで、企画であるなら立案から実施に至るまでの基本的ノウハウや、プロセスがあってしかるべきであろう。」と唱えている²⁵。

またその頃から、ふるさと再発見や、ふるさと新発見への意欲も現れはじめ、それらを考慮したイベント²⁶も各地で行われるようになった。そして、1980年代ころから現代に至るまで、イベントは心の充足を図るものとして重要視され、様々な試みがなされてきた。

その後、イベント時代と騒がれて久しくなったの1990年代の到来である。特に地方自治体をはじめ、商工会議所、青年団、婦人会、さらに教育委員会までもが、地域づくりにおけるイベントの役割を認識し、こぞって地域イベントに関心を示し始めた。

²⁴ 二瓶(1986)を参照。

²⁵ 二瓶(1986)は、イベントの中でも特に目立って増加してきた“新しい祭り”に注目している。

²⁶ 木村・小山(1986)各地域の試みが記されている。

1989年には“ふるさと創生一億円”が交付された。ところがその結末はお粗末なもので、地域のソフト面の活用にと言われながらも、実際は温泉採掘などハード面の充実に当てられたのがほとんどであった。そこでもう一度イベントというものを考えようと様々な人が多くのケースを取り上げて、再度イベントを検証し始めた。

鶴見他(1989)は、第二回下町シンポジウム“祭り(イベント)のつくりかた”の記録にもとづいて『祭りとイベントのつくり方』を編集した。それは、表面的なにぎやかさにもかかわらず、本当に人間らしい祭り・イベントにはなり得ないのは何故かを考えるに当たり、まずは祭りという祝祭的なものの一切を、出発点にたちかえって根元的なところから問い直してみようという試みだった。

また、二瓶(1990)は、各地でイベントが失敗に終わる現状を見て、「大半の地域は自ら考え、自ら行う知恵が枯渇していると言わざるをえない。」と指摘した。そして、二瓶(1990)は、理屈ではなく具体的でわかりやすい手引き書として、多くのケースを紹介した『イベントからのまちづくり』を執筆した。

そして、『イベント白書'93』では、イベント及びイベント産業の振興に資するものとして、現代社会を三つの切り口から眺め、高度情報化社会、ゆとり社会、ソフト社会におけるイベントのあり方を各々考察している。さらにイベントの秘める可能性を企業側、自治体側から探っている。それらの研究・分析から、イベントは高密度な情報の蓄積、各種の情報の交流、特定化された対象への情報発信機能などの特性をもつコミュニケーション手段として、異業種交流、人的交流、国際交流、ネットワークづくりなどに大きな貢献をし、イベントをすることによって、個人消費の喚起による内需拡大、社会資本の整備や民間設備投資の促進を通しての地域振興・雇用促進、地域住民の意識の高揚、個性ある地域づくりなどの面で大きな効果を発揮することを示している。

このように1990年前後にイベントというものの見直しが行われた。次第にイベントの充実を物語るかのように、イベントの成功が見られるようになってきた²⁷。そして次第に、“イベントで街づくり”や“成功のカギは市民参加”などという言葉が、雑誌・新聞記事を賑わすようにもなってきた。

このように、市民参画型のイベントは着実に成功を収め始め、日本イベント産業振興協会は、イベントと市民参画という視点からイベント情報のファイルとして『イベント白書2000』を編集した。ところがそれによると、イベントはまだまだその力を発揮しきれていない現状²⁸が示されていた。イベントは以前から指摘されているように、情報伝達の双方向性があるメディアであり、また目的を達成する手段となりうる。さらに、これからの21世紀は国による地域づくりではなく、地域主体の地域づくりが

²⁷ 八王子いちよう祭り祭典委員会(2000)を参照。

²⁸ 野田(2001)は地域の文化に注目したイベントを研究している。

進むとされている。すると、なおさらイベントの主体が行政から住民へ移っていくことが重要性和考えられる。『イベント白書 2000』では、大衆社会から個人中心社会、心の充実を求める社会、地域社会重視の時代におけるイベントのあり方はもちろんのこと、新たな視点として、ネット社会、少子高齢化の社会、ボランティアの盛んな時代におけるイベントの役割を指摘している。それらを考慮した上で、“心を満たし、地域創造をする”イベントが、いま求められていることは事実のようである。

2.7 YOSAKOI ソーラン祭りおよびよさこい祭り

2.7.1 YOSAKOI ソーラン祭り

YOSAKOI ソーラン祭りとは、1992年に、高知県の「よさこい祭り」と北海道に古くから歌い継がれてきた民謡・ソーラン節が融合して生まれた、新しい参加型の祭りである。誕生のきっかけは、北海道大学の学生が目にした高知の「よさこい祭り」から始まる。街中に響き渡る「よさこい節」と「鳴子」のリズム、生き生きと踊る同年代の若者たち。こんな祭りが北海道にあったら……。そんな思いを、夢を実現しようと北海道の学生が立ち上がり社会に挑戦していったのだ。立ち上げ当時の数々のエピソードは、北川泰斗(1996)の『街は舞台だ』や、軍司貞則(1996)の『踊れ!「YOSAKOI ソーラン祭り」の青春』に記されている。

この祭りの開催期間は、六月上旬から中旬にかけての5日間である。その祭りの期間だけ大通公園には「よさこいソーラン神社」なるものが設置されている。ちなみに本来は全く宗教色のない祭りであった。

この祭りには、二つのルールさえ守れば誰でも参加できる。ルールの一つは、手に鳴子を持つこと。もう一つは、曲のどこかにソーラン節を取り入れること。そのルールさえ守れば、あとは何の束縛もない²⁹。参加するチームは、それぞれ思い思いの衣装や音楽・振り付けを楽しむ。それが「YOSAKOI ソーラン祭り」のスタイルである。それと同時に、一つとして同じチームが存在しないからこそ、見るものを飽きさせないエンターテインメント性が育まれたと言える³⁰。

2.7.2 YOSAKOI ソーラン祭りの成長

YOSAKOI ソーラン祭りが札幌を中心に展開し、次第に北海道内に広まり、同時に

²⁹ 参加者に性別、年齢別、地域別に資格制限が設けられていない(森田 1999)。

³⁰ 踊りや音楽について、年々、チームごとに工夫を凝らした進化が見られるのも、普遍であることを基調とする伝統的な祭りとは対照的な点である(森田 1999)。

全国各地に伝播したことを裏付けている。森（1999）は、このように膨張・拡大した YOSAKOI ソーラン祭りを、優良観光イベント³¹化した祝祭イベントとしてとらえられている。

この地域的展開の要因を研究したものとして、以下の二つがあげられる。まず一つは、森（1999）が、祝祭イベントが形成する新たな社会関係の意味と、その媒介機能について論じている。その際の論点は、数々のヒアリング調査から得られた YOSAKOI ネットワークの初期形成段階から地方への波及過程についてである。結論として、YOSAKOI ネットワークの形成で欠かせないものは、学校という施設とその社会的役割であると指摘している。また、札幌以外の地方の祭りにおける“マンネリズムの脱却”という意味でも評価できると記している。また参加者の半数以上を占める女性参加者にとって、札幌が日常から解放されるハレの舞台の役割を担っていること、また常に見られていることを意識する場所となっていることを指摘し、それがこれほど大勢の人々が参加する祝祭イベントになった要因の一つではないかと記している。

さらに視野を広げて、YOSAKOI ソーラン祭りだけでなく、YOSAKOI ソーラン祭りに影響をうけて全国各地に新たに立ち上がった各地の「よさこい」形式の祭りの地域的展開も研究されている。阿南他（2000）は、伝播の実態がうかがえる“ねぶた”と“よさこい祭り”を取り上げ、これまでの都市祭礼研究が、祭りの伝統的側面を強調し当該地域との結びつきに重点を置いたものが大半を占めている中で、それに対し、祭りにおいても伝播の要素が重要であることを指摘し、祭りの動態的理解を目指した。また、矢島（2000）は、数々の「よさこい」形式の祭りを取り上げ、「よさこい」導入のパターンを記した。その際に「よさこい祭り」が全国に展開した要因として、インターネットの果たした役割の大きさを指摘している。

その他に、森（1999）は、よさこい系祭りをはじめ、今急速に増えつつある“祭り=イベント”の現代的な祭りに共通していえることとして、女性の参加と、地域や世代を越えた参加が目立っていることを指摘している。かつては特定地域の男性だけに限る傾向の強かった伝統的な祭りとは対照的なことである。また、全国大会と銘打たなくとも、海外を含めて各地の祭りに、お互いのチームを出し合い交流を深めているのも大きな特徴であると指摘している。

2.7.3 YOSAKOI ソーラン祭りの誕生

YOSAKOI ソーラン祭りの企画段階の変遷については、北川泰斗（1996）の『街は舞台だ』の資料編に書かれている。本研究を進めるにあたり、注目したい点があったので触れておく。それは平成4年（1992年）4月9日の「よさこいソーラン祭り」記

³¹ ホール（1996）の優良観光イベントを参照。

念シンポジウム試案における討論テーマについてである。そこに5項目が示されていて、現代における自己実現の欲求 祭りの考察と若者の位置づけ 若者を取りまく社会環境、とくに近隣、地域 地方からの文化の相互交流とその実現手段 若者の安住、交流条件というものがあつた。これは試案ではあるが、これらのことを柱として YOSAKOI ソーラン祭りを創り上げたと考えることが出来る³²。ここで注目したいのは、この祭りが行われる前段階で既に、若者の役割、そして自己実現ということが考慮されていたという事実である。

2.7.4 YOSAKOI ソーラン祭りへの批判的意見

YOSAKOI ソーラン祭りに関する批判的な意見として、第七回あたりから学生の手作りという本来の趣旨から離れて商業主義に走ったという市民の声もあることや、審査制度の導入についての反対意見があることに対し、森(1999)は安易に商業主義のレッテルをはるのではなく、誰がこの商業プロセスを支配しているかに注目し、参加者が貪欲に観客を楽しませることを追求する姿勢にこそ、時代の変化に柔軟な札幌の姿が映し出されているのだということを強調している。また、「YOSAKOI ソーラン祭り」組織委員会専務理事の長谷川(2000)は、YOSAKOI ソーラン祭りというイベントは、従来の助成金で成り立つのとは違い、意思のある人たちが自らのお金を払って参加し、自分たちでルールを作り実現していくスタイルをとっていることを主張した。そして、このイベントの生命線とも言える大通り西八丁目ステージを聖域とし、今後その部分は学生の力のみで運営していく意志を示している。

2.7.5 よさこい祭り

YOSAKOI ソーラン祭りを研究するに当たって、元祖であるよさこい祭りについても知る必要がある。よさこい祭りは、高知県最大の祭りである。この祭りの誕生の経緯は、商工会議所のメンバーが隣の県 - 徳島の“阿波踊り”に負けられないような市民の祭りをつくりたいと行政に働きかけたことである。その後 1954 年に、戦後の経済復興と景気対策を目的としてこの祭りは創られた。そして今も運営は商工会議所内の「よさこい祭り振興会」が中心となっている。祭りの開催日は、8月9日から12日と決まっている。9日が神事である祈願祭で始まる前夜祭が行われ、10・11日は本祭、

³² 実際のシンポジウム企画では、(1)札幌でよさこいソーラン祭りが開かれるにあたっての、両地方の比較(2)東京にない地方都市の共通の都市性・現代性を、よさこいソーラン祭りを実現させた背景を考える中で検討する(3)地方からの文化の相互交流の可能性と実現の方法(4)従来の地域興しと今回の祭りの比較(5)若者が主体となる地域おこしと、そのなかでの大学生の役割など(6)若者が自己実現をはかる場としての地方の優位性をどう確立するかが話し合われた。

12日は後夜祭が行われる。しかし、時代を経るにつれ、祭りとはいっても次第に“踊り”のみが重視されるようになった。ところが「よさこい」形式の祭りが全国に普及し、1999年に全国大会も開催されると、細々と続いていた祈願祭であったが、それを機に高知大神宮の境内に「よさこい稲荷神社」が誕生し、そこには特大鳴子が奉納された。

2.7.6 よさこい祭りに関する研究

よさこい祭りに関して、内田忠賢が多くの論文を書いている。内田(1992,1994,1998)は、祭りの人と場、踊り子隊と競技場に注目している。そこでは、踊り子隊は匿名性を帯びており、競技場は市街地の拡大・商店街の盛衰に応じて移動するという見解を提示している。さらに内田(1993)は、祭りの相当部分を参加者側が主体的に動かしていると指摘し、参加者が自然発生的に増加したこと、祭りの内容も参加者側が意図的に変えて踊り子隊を編成していること、そしてそれこそが現在の隆盛をもたらしたことも間違いのないと言っている。

その他には、伊藤(1987)が、シンポジウムでのコメントで「よさこい祭りは、個人的な自由な参加の道が多様に確保されている祭りである。」「よさこい祭りは、人間関係、組織の面でも都市的な要素を非常に明確な形で展開していく祭りである。」と述べている。また矢島(2000)は、「よさこい祭り」には、柳田國男が述べるような都市の祭礼の特徴である“見物人の存在”が不可欠であるとし、さまざまな事象をふまえて現代の典型的な“都市の祭り”であるとしている。さらに、この祭りが全国に伝播した際に関わる“人”に注目し“感動した旅人”の存在を記した。

2.8 知識

知識は、その存在に制約を受けている(マンハイム,シェーラー 1973)。また、知識は、特定の文脈(コンテキスト)やある関係においてのみ意味を持ち、それらの意味は状況に依存する(野中・竹内 1996)。中でも、社会科学で扱われる「社会性」を帯びた知識を社会的知識と言うが、それは、自らのもっている情報に他者のもっている情報を結合させたときに、初めて意味を持つ(坂井 1999)。特にその社会的知識については、バーガー&ルックマン(1977)が社会における知識の役割ということで、体系的に説明し、坂井(1999)は知識と社会的行為の実践とがどのような関係にあるかを説明した。

また、その知識がいかに創られるかについて、野中・竹内(1996)は、社会的相互作用によってダイナミックにつくられるとし、知識を暗黙知と形式知に分け、組織的

知識創造の理論的枠組みを構築した。暗黙知とは、特定情報に関する個人的な知であり、形式化したり、他人に伝えたりすることが難しい知識のことである。また、形式知とは、明示的な知であり、形式的、論理的な言語によって伝達することが可能な知識である。しかし、現在、知識の断片が、断片のままに放置され、専門知識のみが、いたずらに貯蓄され、これらを総合する努力が行われない事態が存在する（坂井1999）。

2.9 まとめ

本章では、数々の先行研究から、本研究を進めるにあたっての知見が得られた。それを以下にまとめる。

祭りに人は何を求めてきたのか。そこで、まずは人間の欲求について調べた。その結果、人間の欲求の研究として、マズローの欲求階層論は広く受け入れられた信用度の高い研究であることが分かった。また、欲求階層論を適用するにあたって、各段階で欲求が満たされて消滅することが、その段階の健康度を示す指標であること、またその理論には、様々な例外があることも認識できた。さらに、欲求階層論の最上段を占める「自己実現」の欲求を満たすこととは、人が生きがいを感じる一つの手段であることが分かった。

また、人は望むと望まざるとに関わらず、常に自我を認識しながら生きている。そこで、アイデンティティや居場所の先行研究を調べたところ、人は常に自分を確認しながら生きている生き物であること、さらに、自分を確認できなくなると不安に陥るということが分かった。そして、居場所において、人はアイデンティティの感覚を覚えることができ、それは、自分の可能性を実現して、それを他者に認めてもらうことまたは認めさせることによって得られるものであることが分かった。また、居場所を扱うにあたって「場」についてレヴィンの定義を用いて「個人の生活空間」とした。この「場」とは社会生活における人間関係も含めた概念である。そこで、社会における人間関係を全て網羅する分類として「縁」を取り上げ、現代的な祭りにおける人間関係は「選択縁」に属するものであるとした。

さらに、YOSAKOIソーラン祭りを取り上げるにあたって、これまでのイベントや祭りの研究を調査した。そこで、イベントが時を経て熟成し、参加者がそれを通して自己のアイデンティティを確認することができたとき初めて、イベントは祭りになるという知見が得られた。また、イベントでも祭りでも人が直接集まり生活空間を共にするということの重要性が「知識の共有」という視点から明らかになった。

第 3 章 事例分析

3.1 はじめに

本章では、まず、アンケート調査の概要を示し、次に、収集したデータの分析から得られた結果を、4項目に分けて考察する。

1) YOSAKOI ソーラン祭りに対する踊り子の満足状況について、2) 踊り子がなぜ踊り子として祭りに参加し、観客がなぜ観客として祭りに参加しているのかの違いについて、3) YOSAKOI ソーラン祭りが満たすことのできる欲求について、4) YOSAKOI ソーラン祭りからの踊り子が卒業することについて。

3.2 アンケート調査の概要

3.2.1 アンケート調査の目的

調査目的は以下の三点である。第一に、YOSAKOI ソーラン祭りに対する満足状況を時間の経過とともに把握することである。第二に、様々な角度から踊り子と観客の違いを明らかにすることである。第三に、踊り子と観客にとって YOSAKOI ソーラン祭りはどのような存在であるのかを明らかにすることである。

3.2.2 アンケート調査の対象

アンケート調査の対象は、2001年6月5日から6月10日に行われた「第10回 YOSAKOI ソーラン祭り」の参加者である。参加者とは、祭りに関わるもの全てを指し、今回は参加者の中でも踊り子と観客に注目した。対象人数は、踊り子16チーム477人と、観客406人の合計883人である。

3.2.3 アンケート調査の方法

踊り子について

本祭中に、任意に選んだ16チーム¹に対して、アンケートの協力を依頼し、本祭後すぐにアンケート用紙を各チームに郵送した。その時期に実施したのは、本祭後の興奮が冷めきってしまわぬうちにアンケートに回答してもらうためである。そして、アンケートの回収締め切りは、本祭から一ヶ月後²の七月中旬とした。

調査対象チームを選んだ基準は、企業チーム、学生チーム、地域密着型チームなど、互いに趣向の異なるチームであることと、また、ほぼ一年中活動を続けていることである。ちなみに16チーム中、約半数が第10回の本祭で上位に入賞したチームである。

観客について

第10回 YOSAKOI ソーラン祭り（本祭）の観客を対象とした。それは、プレリハーサル、予選、前日祭であるソーランナイトを含めた計6日間に及ぶ調査期間である。そして、一人一人から回答を直接聞き取り、その場で回答を用紙に記入する方法で調査を進めた。調査対象の人数は定めず、調査期間中に集められるだけを目標にアンケート調査を行った。

調査場所は、全33会場に及ぶ演舞会場のうち、特に栈敷席やメインステージがある大通り付近の会場にいた観客を対象に行った。具体的に調査を行った会場は、大通り南北パレード会場、大通公園西八丁目会場、ワオドリソーラン会場、一番街三越前会場、一番街丸井今井会場、FUNKY すすきの会場、きたえーる会場、澄川会場、東札幌会場である。

3.2.4 アンケート結果の分析手順と分析方法

まず質問項目ごとの単純集計を行い、その後、分析目的に合わせて、データ処理の方法を変えていった。例えば、分析目的が集団の特徴を明らかにすることである場合は、基本分析である単純集計やクロス集計を行った。さらに、データどうしの因果関係や影響度、貢献度をみたいときは、基本分析の後に、関連分析である相関分析³を行った。そこで相関があった場合は、続けて検定を行った。

¹ 一般チーム6チーム、学生チーム7チーム

² チームに対するアンケート回収締め切り日時は、2000年7月15日である。

³ 相関分析の手法及び判定基準については付録を参照のこと

3.3 YOSAKOI ソーラン祭りの機能

3.3.1 YOSAKOI ソーラン祭りに対する満足状態

「伝統的な祭り」には、参加者を集める「核」となるものがある。その核とは、神であり、あるいはその象徴である依代のような聖なる存在である。人々は、その核をめぐる祭り執り行い、そのことを通じて自分と他者とのつながりを感じてきた。ところが「現代的な祭り」では、そこでいう「核」なるものの存在が非常に薄れている。このYOSAKOIソーラン祭りも例外ではない。実際、第一回のYOSAKOIソーラン祭りに、その「核」なるものは実在しなかった。しかし、始まりに「核」なるものがなくとも、人は集まり、YOSAKOIソーラン祭りはここまで大きな祭りとなった。

祭りとは、自己の社会的な位置が確認できるところに存在し、あくまで参加者の情緒的な欲求がいかに満たされているかが基準である(森田 1999)。その基準でいけば、「核」抜きで人々を集めたYOSAKOIソーラン祭りは、人々の欲求をどれほど満たしているのだろうか。そこで、人々がYOSAKOIソーラン祭りに対して抱いた気持ちの変化を追うことにした。

アンケートでは、YOSAKOIソーラン祭りに対する欲求を、祭りに対する「期待」とし、また、YOSAKOIソーラン祭りによって欲求が満たされたという感覚を、祭りに対する「満足」とした。それらの気持ちの状態を、以下の三つの時点において調査した。まず一つ目が、チームに所属する前の「祭りに対する期待」、二つ目がチームに所属した直後の「祭りに対する満足」、また、三つ目は今回の祭りに参加した直後の「祭りに対する満足」である。祭りに「期待している気持ちの大きさ」(以後“期待度”という)や「満足している気持ちの大きさ」(以後“満足度”という)を、各々「祭りへの気持ち」の大きさとした。評価の基準は五段階で、非常に大きい、やや大きい、どちらでもない、やや小さい、非常に小さいである。そして、その気持ちの大きさを得点化⁴して、その時点での平均満足度を求めた(図 2-1 を参照)。

⁴ 得点は、回答の「非常に大きい」を5点、「やや大きい」を4点、「普通」を3点、「やや小さい」を2点、「非常に小さい」を1点とした。

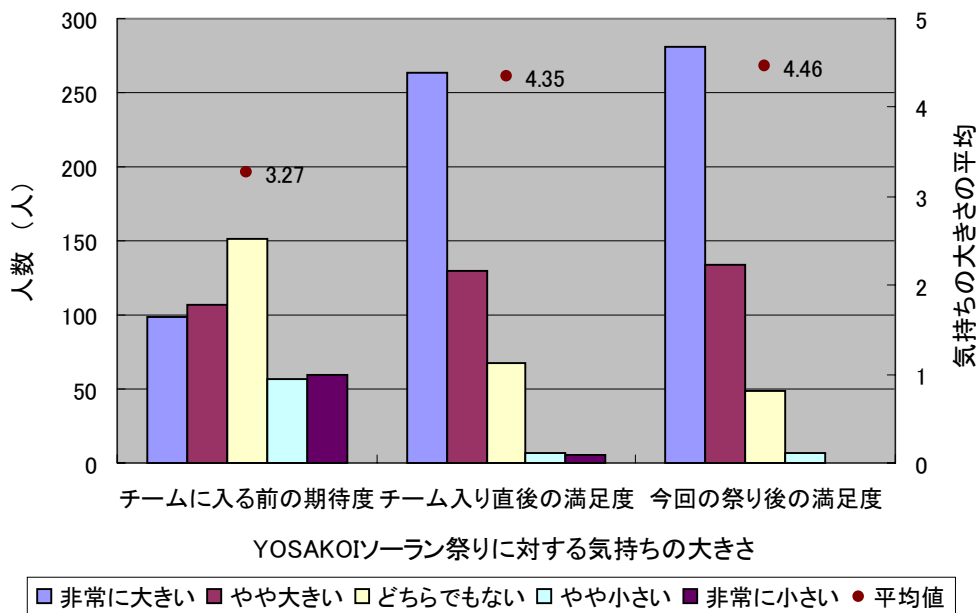


図 3-1 踊り子の YOSAKOI ソーラン祭りに対する気持ちの大きさの変化

では、踊り子の YOSAKOI ソーラン祭りに対する気持ちの変化をたどる。注目するところは三点ある。第一に、満足度で表された祭りに対する気持ちの大きさは、いずれも期待度で表された祭りに対する気持ちよりも大きいこと。それは、全体的に YOSAKOI ソーラン祭りが踊り子の期待、つまり欲求を裏切っていないことを意味する。第二に、チーム入り直後から本祭後にかけて、その各々の満足状態にほとんど変化が見られないこと。確かに、平均満足度の値にも伸びが見られない。チーム入り直後の平均満足度はすでに 4.35 を示すのに対して、本祭後の平均満足度は 4.46 である。つまり、この祭りは本祭を経験する前に、すでに高い満足度を人々にもたらしめていることがわかる。第三に、不満足な気持ちを抱えて参加している人は、チーム入り直後で 2%、本祭後で 1% しかいないことが分かった。非常に満足 57%、やや満足 27%、普通 14%、やや不満 1%、非常に不満 1% であり、今回の祭り直後の満足状態は非常に満足 61%、やや満足 28%、普通 10%、やや不満 1%、非常に不満 0% である。このことから、YOSAKOI ソーラン祭りが人々を引きつけたものを探るには、本祭で行われていることだけに注目するのではなく、祭りのチームに所属して本祭へ向けて行われていることに注目する必要があることが分かった。

つまり、チームに入って活動をし始めたことは、人々に何らかの心理的影響を与えているのである。それは、踊り子の満足は、本祭で踊ることからだけでなく、本祭へ向けてみんなで練習に励むというプロセスにも満足していることを意味する。確かに、

これほどまでにレジャーが発達した世の中は、毎日が祭り、毎日がハレ⁵の日と言っても過言ではない。そのため、「祭り」自体の楽しみ方が変化したのかもしれない。池田・村田(1991)は、欠乏を充足する達成性の目標の充足が社会的に重視される時代から、目標の充足そのものの中に「意味」を見出し、その質を問う、コンサマトリーな目標に、社会的な優先順位を与えるという変化が生じていることを指摘している。コンサマトリーな目標とは、プロセス志向の特徴を持った目標のことである(池田、村田1991)。

そのような社会背景も含めて考えると、踊り子の参加目的は、本祭へ向けたプロセス、それ自体を楽しむことにある。そのため、チームに入り直後の気持ちと本祭後の気持ちの変動が小さいのである。池田、村田(1999)は、コンサマトリー性の目標を達成したかどうか、つまり満足したかどうかは、プロダクトではなくプロセスの経験にあり、その経験の質こそが目標を達成したかどうかの判断の基準となるとしている。つまり、YOSAKOIソーラン祭りが人々に満足を与えたということは、人々に良い質の経験をさせていることになるのである。「よい質」が何を示すのかはこれから検討していくが、その質の良い経験こそが、多くの人々を集めたのだろう。そして、そんな人々の厚い支持の上にYOSAKOIソーラン祭りの成功が築きあげられたのである。

3.3.2 YOSAKOIソーラン祭りと踊り子の生きがい

YOSAKOIソーラン祭りには、生き生きとしたエネルギーがある。踊り子は、自らお金をかけ、自らの体力を使って、その祭りに参加する。そして、祭りに集まった人々は、互いの気持ちを高めあい、興奮し、踊り狂うことで、自分の限界に挑戦し、非日常的な精神状態を体験する。そして、そのエネルギーは当事者だけでなく、観客にも伝わる。よさこい系の祭りの伝播には、「感動」した旅人の存在があり、彼らが「感動」を地元を持ち帰ることで、新しいよさこい系の祭りができたのである(矢島2000)。また、踊り子のエネルギーが、確実に見ているものにも伝わっている証拠として、アンケート調査をした観客の口から「祭りには結構来ていますよ。元気に踊っている姿をみると、元気をもらえるからね。」という内容の意見を多く得られた。

そして、そのエネルギーは、踊り子たちが本祭へ向けて、一年かけてその準備に取り組むことで蓄えられたのである⁶。踊り子の多くは、20代、30代の若者、特に女性

⁵ 「ハレ」とは晴れやかなことであり、日常の生活を「ケ」としたときに用いる用語である。

⁶ しかしチームの中には、祭りの2.3ヶ月前に集まって練習して参加するというチームも存在する。しかし、今回のアンケート調査を行ったチームはどのチームもほぼ1年間活動をしているチームである。

が多い⁷。森（1999）は、よさこい系祭りをはじめ、今急速に増えつつある現代的な祭りに共通していえることとして、女性の参加と、地域や世代を越えた参加が目立っていることを指摘している。かつては特定地域の男性だけに限る傾向の強かった伝統的な祭りとは対照的なことである。

チーム⁸に所属する踊り子の多くは、踊り子である反面、みなそれぞれ自分の生活、すなわち職業⁹を持っている。学生には学校があり、サラリーマンには会社がある。したがって、当然練習は日中ではなく夜に行い、また土日の休みを使ってやることになる。しかし、彼らは「YOSAKOI ソーラン祭り」の本祭において、自分たちのやってきたすべてを観客の前で披露したいという一心でがんばるのである。彼らは、そうやって自分を消耗しながら、生き生きと輝いているのである。それ故に、本祭には、観客の心に響く感動があるのであろう。そして、日常の休息時間を減らしてまで練習していながらも、より生き生きとしている彼らの姿は、彼らにとって YOSAKOI ソーラン祭りが「生きがい」以外の何物でもないことを証明している。

彼らの「生き生き」した姿は、本研究を進めるにあたっての示唆を与えた。それは「居場所」という概念である。ある状況が、自分にとって生き生きするものであるときには、「そこには居場所がある」と思え、逆に自分にとって苦しい状況においては、「自分には居場所がない」と感じる（小沢 2001）。居場所とは、われわれが生活を営む上での意味付与を関わる「場」¹⁰（社会的空間）のことである（三本松 2001）。つまり、単に物理的な空間を指すものではない。それは、「自分」という存在感とともにあり、自分と他者の相互関係において生まれる（田中 2001）。たとえ、「情報空間」という、現実の場所ではない空間ですら、それが仮想的に自己拡張しやすいために、自分自身を肯定的に確認することの出来る居場所となりうる（佐々木 2001）。居場所とは、空間的な「居」場所と時間的な「居」場所がクロスしたところに存在し、社会的な関係性によって意味づけられるものなのだ（高塚,2001）。つまり彼らにとって、YOSAKOI ソーラン祭りは自分にとっての「居場所」であり、あのエネルギーは自ら獲得した「居場所」への精一杯の試みなのではないだろうか。ただただ「楽しいからやっている」と言う踊り子の裏に隠された心理をここから追っていく。

⁷ 「これは女の祭りだ」と YOSAKOI ソーラン日本海専務理事桶谷茂樹さんは言う。

⁸ 子どもチーム、一般チーム、企業チーム、道外チームという分類がある。

⁹ 学生、専業主婦、有職者（会社員、公務員、自由業、自営業、パートなど）など、その人の社会的地位を指す

¹⁰ 三本松（2000）は、場には空間性と社会性がある、と追記している。

3.4 踊り子と観客の違い

「居場所がある」、または「居場所がない」という言葉は、自分が生活を送る様々な場面において、自分がどれだけ生き生きとしていられるかの指標と、自分にとっての意味や意義を見出せるかの指標となっている（小川 2001）。そこで、本研究ではとした。そこで、「居場所」という視点を含めて、踊り子と観客の比較を行う。踊り子が何処に居場所を見出し、観客は何処に居場所を見出しているのか。また、踊り子と観客の日常生活への取り組み方に相違がみられるか、等を検討する。

3.4.1 「居心地がよい」場所と「認められている」場所

「居場所」は、空間性と社会性という二つの側面を持つ。その二つの側面に注目するとき、居場所は個人の生活への意味付与とともに、コミュニティ形成へのアクセスポイントとなる。確かに、社会とは主観的現実として存在すると同時に客観的現実として存在する（バーガー&ルックマン 1977）。そこで、このように社会的関係性の中に存在する「居場所」について、本研究では次のような見方をする。

「居場所」とは、自分という存在感とともにある（荻原 2000）。そこで、本人が「居場所がある」と感じることを、二つの軸から考えてみた。一つは、人間関係で「居心地がよい」から「居場所がある」と感じる場合と、もう一つは、他者により自分の価値を「認められている」から「居場所がある」と感じる場合である。

踊り子や観客が、何処に居場所を持っているのかを調べた。アンケートでは、彼らが「居心地がよい」と感じる場所や、「認められている」と感じる場所に対して、家庭、地域社会、学校、職場、そして趣味の集まり・仲間の集まり、ボランティア活動、その他、そして特になしの選択項目を提示した。そして、その中からあてはまる項目全てにチェックをする複数回答形式¹¹をとった。

そして、それらのデータを分析した。その際、「居場所」が社会的空間を意味し、すなわち人と人の関係性の中にあるためであることを考慮し、「縁¹²」という概念を用いて選択項目をグループ分けした。縁は、血縁、地縁、社縁、選択縁の四つに分類されている。家庭は血縁、地域社会は地縁、学校や職場は社縁、趣味の集まり・仲間の集まり、ボランティア活動は選択縁¹³、という対応関係である。その分類でいくとYOSAKOIソーラン祭りで形成された人間関係は、「趣味の集まり・仲間の集まり」

¹¹ 複数回答形式にしたのは、一人の人間にとって「居場所」と思える場所は五個以内という指摘があった（小沢 2001）ためである。

¹² 上野（1994）を参照。

¹³ 選択縁とは、血縁でも地縁でも社縁でもない縁のことを指す。

つまり選択縁に相当する。果たして YOSAKOI ソーラン祭りは、踊り子達にとって「居心地がよい」場所となっているのか。また、「認められている」場所であるのか。

まず、踊り子または観客が、「居心地がよい」と感じる縁と、「認められている」と感じる縁がどれであるかを調べる。次に、その集計結果をもとに、各縁に対して彼らが「居心地がよい」と感じている割合と、「認められている」と感じている割合を求めた。(図 3-2 を参照)は、各縁に対して「居心地がよい」場所としている割合と「認められている」場所としている割合を示している。つまり、その縁を「居場所」と感じている人が、「居心地がよい」と認識しているのか、「認められている」場所としているのかが表されている。左側が踊り子の結果で、右側は観客の結果である。

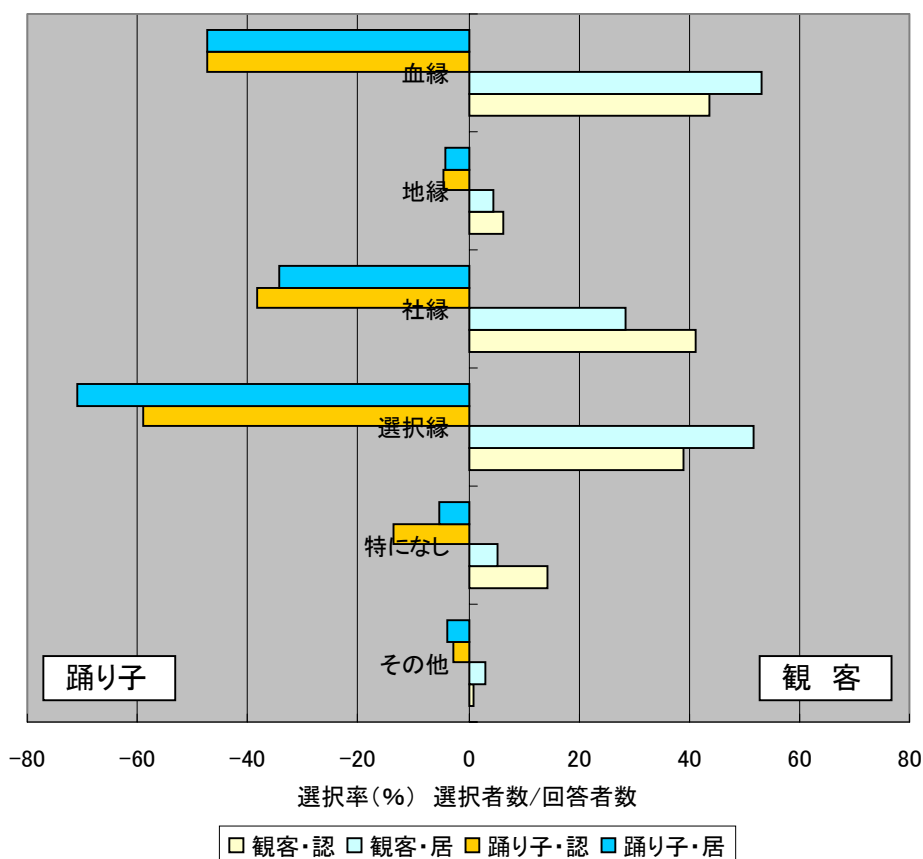


図 3-2 「居心地がよい」場所と「認められている」場所

まず、「居心地がよい」場所について考察する。踊り子と観客が選択した割合で、最も大きな違いが見られたのは選択縁である。選択縁に「居心地がよい」と感じる踊り子の割合は全体の 72% で、観客よりも約 20% も多い値を示した。このように踊り子が選択縁を選んだ割合が高い背景には、やはり YOSAKOI ソーラン祭りの踊り子であ

ることが影響していると考えてまちがいないだろう。一方、血縁、地縁、社縁に「居心地がよい」と感じる人の割合は、踊り子と観客であまり差がなく、差が大きいところでも 6%しか差がない。敢えて言うならば、社縁に「居心地がよい」と感じるのが踊り子で、血縁に「居心地がよい」と感じるのが観客である。

次に、自分の価値を「認められている」と感じる場所について考察する。「居心地がよい」場所と同様、踊り子と観客が選んだ縁の中で、最も差が現れたのは、選択縁である。踊り子が選択縁を選んだ割合は全体の 57%で、観客よりも 20%も高い値を提示した。このように踊り子が選択縁を選んだ割合が高い背景には、YOSAKOI ソーラン祭りの存在が大きく影響していると判断して間違いではないだろう。それ以外の縁では、踊り子と観客でおおよそ似た値を示し、その差は大きいところでも 7%であった。つまり、踊り子は血縁で認められていて、観客は社縁や地縁で認められていることが言える。

確かに、集計結果の X 二乗検証を行ったところ（表 3-1,表 3-2 を参照）「居心地がよい」場所に関しても、「認められている」場所に関しても、踊り子と観客が有意（p 値 < 有意水準 0.01）であることが確認できている。

表 3-1 「居心地がよい」場所
の検定結果

	踊り子	観客
血縁	///	**
地縁		
社縁		
選択縁	**	///
特になし		
その他		

表 3-2 「認められている」場所
の検定結果

	踊り子	観客
血縁		
地縁	/	*
社縁	///	**
選択縁	**	///
特になし	///	**
その他	**	///

有意である（結論が間違ふ確立は 1%） ; [**] または [///]
 有意である（結論が間違ふ確立は 5%） ; [*] または [/]
 有意であるとは言えない ; []

注 1) 有意とは当該セルの度数が極端に大きい（あるいは小さい）ことをいう。

注 2) 「*」は極端におおきい、「/」は極端に小さい、を意味する。

これらの結果から、踊り子は観客よりも、選択縁を人間関係で「居心地がよい」と感じる場所、また自分の価値を「認められている」場所と捉えている人が多いが確認された。ここで選択縁を敢えてYOSAKOIソーラン祭り置き換えるのは乱暴かもしれないが、先程のYOSAKOIソーラン祭りに対する満足度の結果からいくと、踊り子がYOSAKOIソーラン祭りのチームに所属していることが大きく影響しているものと考えられる。

一方、血縁と社縁を「居心地がよい」場所として評価する割合と自分の価値を「認められている」場所として選ぶ割合では、踊り子と観客で異なった傾向が見られる。観客は「居心地がよい」場所として、踊り子に比べて血縁を選ぶ割合が高く、社縁を選ぶ割合が低い。また、自分の価値を「認められている」場所として、踊り子よりも社縁を選ぶ割合が高く、血縁を選ぶ割合が低い。一方、踊り子は「居心地がよい」場所として、社縁を選ぶ割合が高く、血縁を選ぶ割合が低い。また、自分の価値を「認められている」場所として、血縁を選ぶ割合が高く、社縁を選ぶ割合が低い。

観客は、踊り子よりも血縁を「居心地がよい」場所として選択する割合が高く、社縁と地縁を自分の価値を「認められている」場所として選択する割合が高い。そして踊り子は、観客よりも選択縁を「居心地がよい」場所として、また「認められている」場所として選択する割合が高い。

ちなみに、一人の人間が「居場所」とする場所は、大抵一カ所ではない。自分の居場所について、人は自覚的に意識して捉えている。一般的に人は五個以内の居場所を持っているとされている。それぞれの居場所における、自分にとっての生き生きとした感じの度合いや、その逆の葛藤の度合いは色々あるであろう。しかし、人は自分の生活の中での居場所については、いくつかあるかということについて把握できていると考えられる（小沢 2001）。そこで、以上の結果は、踊り子と観客が「居場所」と感じる場所に違いがあることを示したことになる。

3.4.2 居場所

次に、「居場所」と認識されている縁が、「居心地がよい」という指標と「認められている」という指標で、どのように評価されているのかを調べた。また、それらの感情は、人間の欲求階層論における「所属・愛の欲求」と「承認の欲求」に対応すると考えられる。

二次元空間において、横軸を「居心地がよい」と感じた人の割合、縦軸を「認められている」と感じた人の割合とした。そして、各縁ごとに、「居心地がよい」と感じている人の割合を縦軸の値とし、「認められている」と感じる人の割合を横軸の値として、その座標をとった。すなわちその点は、「居場所」と認識された各縁の存在を

示す。また、その位置（座標）は、各縁の「居場所」が「居心地がよい」、また「認められている」の指標で、どのように認識されているのかの傾向を示している（図 3-3、図 3-4 を参照）。

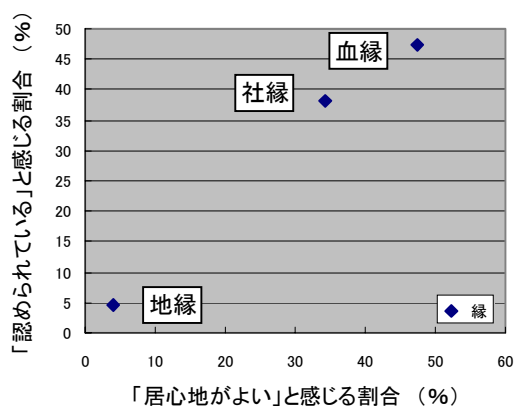


図 3-3 踊り子の居場所

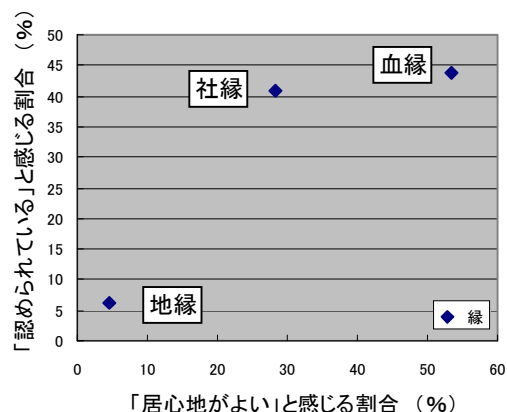


図 3-4 観客の居場所

左の（図 3-3）は踊り子、右の（図 3-4）は観客である。まず、上野（1994）が「選べない縁」としている血縁、地縁、社縁と、「選べる縁」としている選択縁に分けて分析する。

踊り子の場合、「選べない縁」の位置が「『居心地がよい』という指標と『認められている』という指標による評価が一致している居場所」であることが分かる。一方、観客のほうは、「『居心地がよい』という指標と『認められている』という指標による評価にズレがある居場所」であることが分かった。また、観客の血縁における居場所は、「認められている」という評価よりも「居心地がよい」という評価の方が高い。また、地縁や社縁の居場所は「居心地がよい」という評価よりも「認められている」という評価の方が高い。たとえ、同じく血縁に「居場所」があると感じていても、踊り子の居場所と観客の居場所では評価が異なっていることが明らかになった。

そこで、ある縁に見出された居場所を「居心地がよい」という指標による評価と「認められている」という指標による評価を用いて、3タイプに分類して考察をしていく。3タイプとは、A「居心地がよい」という指標と「認められている」という指標による評価が一致している「居場所」、B「居心地がよい」という指標による評価の方が高い「居場所」、C「認められている」という指標による評価の方が高い「居場所」の3つである。この分類を用いると、踊り子の「選べない縁」における居場所はAグループに属し、一方、観客の「選べない縁」における居場所は、BグループとCグループに属していることとなる。つまり、Aグループの居場所をもつ人々が YOSAKOI

ソーラン祭りに踊り子として参加したいと思い。BやCグループに所属する人は観客として参加しているということである。

3.4.3 参加動機

踊り子が参加したいと思った理由と、観客が参加したいと思う理由を比較する（図3-5を参照）。アンケートでは、参加したいと思う理由は全てチェックするという、複数回答の形式をとった。この図は、各項目ごとに全体の何%の人がその項目を選んだのかで比較できるようになっている。

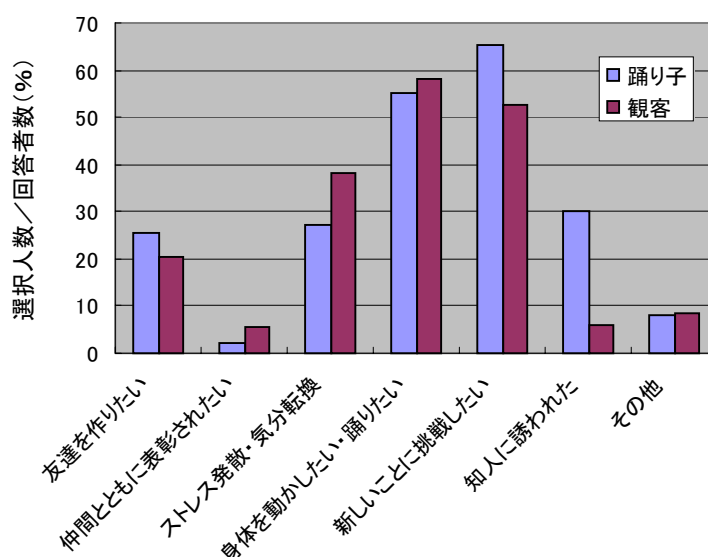


図3-5 踊り子と観客が「参加したい」と思う理由

踊り子が参加したいと思った理由で最も多いのは、「新しいことに挑戦したい」で、次が「身体を動かしたい」、そして「知人に誘われた」が続く。一方、観客の場合は、「身体を動かしたい」、次いで「新しいことに挑戦したい」、そして「ストレス発散・気分転換」となる。

また、踊り子と観客の傾向をみるためX二乗検定をおこなったところ、有意差があった（ p 値 < 有意水準 0.01）。その違いの特徴を（表3-3）にまとめる。

表 3-3 踊り子と観客が「参加したい」と思う理由の検定結果

	友達を作 りたい	仲間ととも に表彰さ れたい	ストレス発 散・気分 転換	身体を動 かしたい・ 踊りたい	新しいこと に挑戦し たい	知人に誘 われた	その他
踊り子		//	//	//	*	**	
観客		**	**	**		//	

(「*」と「/」については、p. 37 を参照)

参加動機の中で、踊り子には、「新しいことに挑戦したい」という人が多く、実際「知人に誘われた」から入った人も多い。しかし、「知人に誘われた」に関しては、踊り子が結果的に誘われたという事実だけで、一概に観客の参加したいと思おう動機と比較することは出来ない。一方、観客は「仲間と共に表彰されたい」「ストレス発散・気分転換」「身体を動かしたい」という理由で参加したいという人が多い。

3.4.4 積極的に取り組んでいること

踊り子と観客が日常生活において積極的に取り組んでいることに相違はなかったか(図 3-6 を参照)。踊り子に関しては「YOSAKOI ソーラン祭り以外」で積極的に取り組んでいることについて調査した。

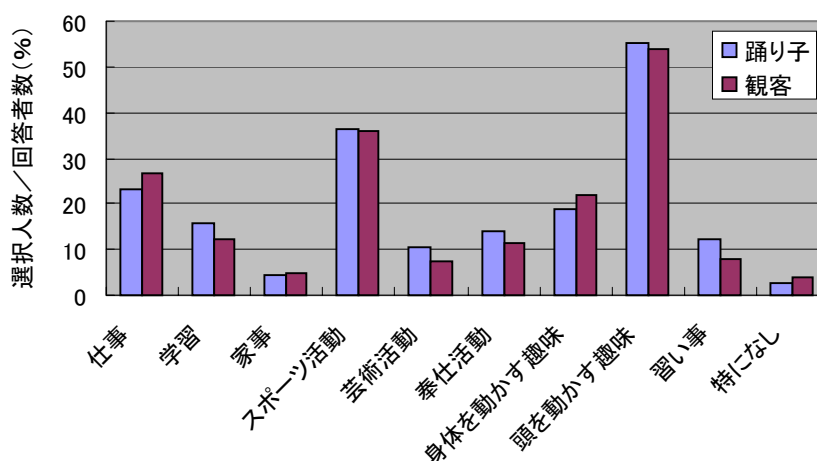


図 3-6 踊り子と観客が「積極的に取り組んでいること」

結果は、ご覧のように、ほとんど違いが見られなかった。また、検証の結果も踊り子と観客に差はみられなかった。また、積極的な取り組みに対する満足度に関しては

五段階評価をしてもらい、ここではそれを得点化¹⁴した。その結果、踊り子の平均満足度は3.70、一方観客は3.74である。つまり、踊り子がYOSAKOIソーラン祭り以外で積極的に取り組んでいることと、観客が積極的に取り組んでいること対しての満足の状態に相違は見られなかった。

つまり、踊り子の今の生活からYOSAKOIソーラン祭りを除いた生活と、YOSAKOIソーラン祭りにもともと関わっていない観客の生活において、両立場のものが積極的に取り組んでいることに対する内容や満足度には、相違がなかったということである。

3.4.5 観客にとってのYOSAKOIソーラン祭り

観客の中には、どれほどYOSAKOIソーラン祭りに参加したいと思う人がいるのだろうか。実際、踊り子の中には、かつては「私も観客だった」という人が少なくない。ということは、調査対象の観客の中にも、観客としてではなく、踊り子としてYOSAKOIソーラン祭りに参加したいと思う人もいるはずである。そこで、観客がYOSAKOIソーラン祭りに参加したいかどうかの意識を五段階¹⁵で評価してもらった（図3-7を参照）。また、その際、参加したくない理由も調べた（図3-8を参照）。

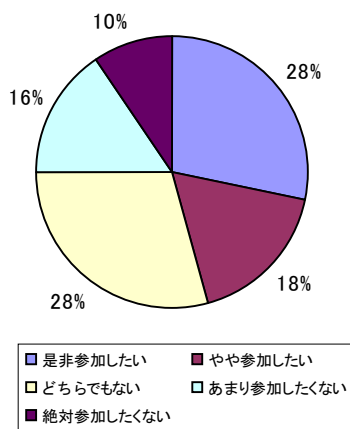


図3-7 参加したいかどうかの割合

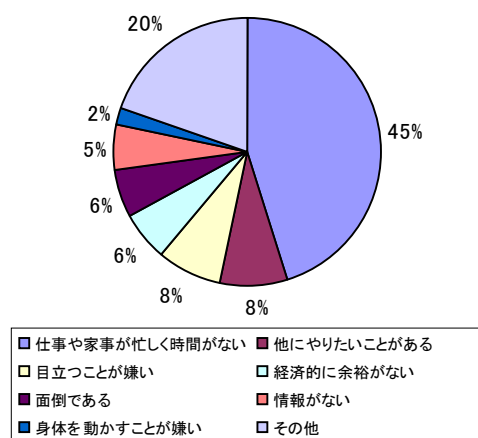


図3-8 参加したくない理由

¹⁴ 「非常に満足」5点、「やや満足」4点、「ふつう」3点、「やや不満」2点、「非常に不満」1点

¹⁵ 「是非参加したい」「やや参加したい」「どちらでもない」「あまり参加したくない」「絶対参加したくない」

ここで、「参加したくない」という意思表示をしているのは観客全体の約四分の一であることがわかる。つまり、四分の三は YOSAKOI ソーラン祭りに対して否定的ではないのである。踊り子全体の約 30% は「どちらでもない」で、約 50% 弱の人々は「参加したい」という回答が得られた。それは、踊り子と観客が、日々積極的に取り組んでいること、またその満足度にも違いが見られなかったことから納得できる結果である。しかし、彼らは踊り子にはならず、観客として参加するのである。

そのような彼らの「参加したくない理由」で最も大きな要因は、「仕事や家事が忙しく時間がない」であった。その次に多い理由は「その他」であるが、その他の記入部分内の内容の多くは「身体が動かない」であった。次いで「他にやりたいことがある」「目立つことが嫌い」「経済的に余裕がない」「面倒である」と続く。また、「身体を動かすことが嫌い」と言った人は全体の 2% しかいなかった。つまり、観客とは YOSAKOI ソーラン祭りに対してそれほど否定的ではないが、現状の生活と YOSAKOI ソーラン祭りの踊り子となった時の生活を天秤にかけた時、あえて踊り子になりたいとは思っていない人々である。

3.4.6 踊り子と観客の相違

踊り子はなぜ踊り子で、観客はなぜ観客なのか。ここまでの踊り子と観客の比較結果から、その違いを考察する。

踊り子が YOSAKOI ソーラン祭り以外に積極的に取り組んでいることと、観客が積極的に取り組んでいることに違いは見られなかった。つまり、踊り子は YOSAKOI ソーラン祭りをやらなくとも、積極的に取り組んでいることに関しては観客と変わらない生活をしているのだ。つまり、踊り子の方が YOSAKOI ソーラン祭りを目の前に、何らかの動機からより積極的であったと考えられる。確かに踊り子には観客に比べ「新しいことに挑戦したい」という理由が有意であった。

踊り子の背景には、「選べない縁」における居場所が A グループに属していたという事実がある。つまり、「居心地がよい」という指標と「認められている」という指標による評価が一致している「居場所」をもつ人々は、新しいことに挑戦したいという意欲が強いということになる。では、A グループの所属と新しいことの挑戦したい意欲にはどのような関わりがあるのか。マズロー(1987)は「欲求を満足することは、欲求不満を決定する要因である」「人間の欲求は、通常、優勢な欲求が満たされた時のみに現れる」と言っている。つまり、「居心地がよい」という指標と「認められている」という指標による評価が一致しているところに居場所をもつことは、現状の居場所にある程度満足している状態であることが考えられる。そして、その満足が新たな欲求を芽生えた。新しい居場所を求めるようになり、それが新しいことに挑戦した

いという気持ちになった。そんな彼らが YOSAKOI ソーラン祭りを目の前にした時、踊り子なりたいと強く思ったのだろう。

一方観客は、その 4 分 3 の人が YOSAKOI ソーラン祭りに対して否定的ではない。しかし、彼らは踊り子にはならない。彼らが踊り子にならない最大の理由は「仕事や家事が忙しくて時間がない」である。そして、その背景には、彼らが地縁以外の「選べない縁」の居場所が B、C グループに属しているという事実がある。

そこに次のような推測が成り立つ。「選べない縁」において「居心地がよい」という指標による評価と「認められている」という指標による評価が一致しないことは、既存の居場所に未だ満足してないことを意味する。ここでのポイントは「未だ」である。踊り子の場合の居場所に対する不満は、ある程度既存の居場所に満足したことで生まれた。しかし、観客の場合の不満は「未だ」満足してないからこそ不満なのである。両者の不満の意味は異なっていることに注意する必要がある。また、不満を抱えていても「選べない縁」であるが故に、その関係を絶つことができない。そのため鬱憤がたまり YOSAKOI ソーラン祭りを見たときに「ストレス発散・気分転換」という参加理由が頭にうかぶのではないか。しかし、一方で「未だ」満足しないことによる不満は、自分の居場所として機能していることを意味するのではないか。彼らが参加しない理由としてあげる最大の理由は「仕事や家事が忙しく時間がない」である。つまり、彼らには新しい何かに挑戦したいという欲求が生まれるゆとりがない。つまり、観客は今の居場所をしっかりと生きることこそ当面の課題なのである。

ここで踊り子がなぜ踊り子で、観客がなぜ観客なのかをまとめる。簡潔に書くため断定的に記すが、これはあくまで「傾向」である。踊り子は、「選べない縁」において「『居心地がよい』という指標と『認められている』という指標による評価が一致している居場所」をもつ。その一致は彼らを満足させ、その満足は新たな欲求を生み、既存の「居場所」は彼らの欲求を満たす「居場所」として機能を果たさなくなり、そして、彼らは新しい居場所を求めるのである。そのような踊り子にとって、その欲求を満たす先が YOSAKOI ソーラン祭りなのである。一方、観客は「選べない縁」において「『居心地がよい』という指標と『認められている』という指標による評価にズレがある居場所」をもつ。その不一致は、「居場所」満足していない気持ちを持つと同時に、現在の「居場所」が彼らの欲求を満たす「居場所」として機能していることを意味する。そのため、彼らは新しい居場所を求めるよりは、まずは現実を生きることを選択する。

3.5 居場所と YOSAKOI ソーラン祭り

3.5.1 「居場所」に関する二側面の満足状態

「居場所」の「居心地がよい」という側面と、「認められている」という側面の満足状態について、踊り子と観客で相違が見られるのだろうか。各々の満足状態は、「非常に満足」「やや満足」「普通」「やや不満」「非常に不満」の五段階で評価されている。どの段階の満足状態の人がどのくらい居るのかを調べた（図 3-9, 図 3-10 を参照）。

その結果、「居心地がよい」についても、「認められている」についても、踊り子と観客の満足状態に大きな相違は見られなかった。さらに、「居心地がよい」場所と「認められている」場所の各々の満足状態について、2 * M 分割表をつくり検定を行った結果（付録 3）からも、両者とも差がないことが証明された。

つまり、「居場所」の「居心地がよい」という側面と、「認められている」という側面に対する満足は、YOSAKOI ソーラン祭りのチームに所属し、本祭にも出場した踊り子と、踊り子として活動していない観客とが同じ状態であることが分かった。

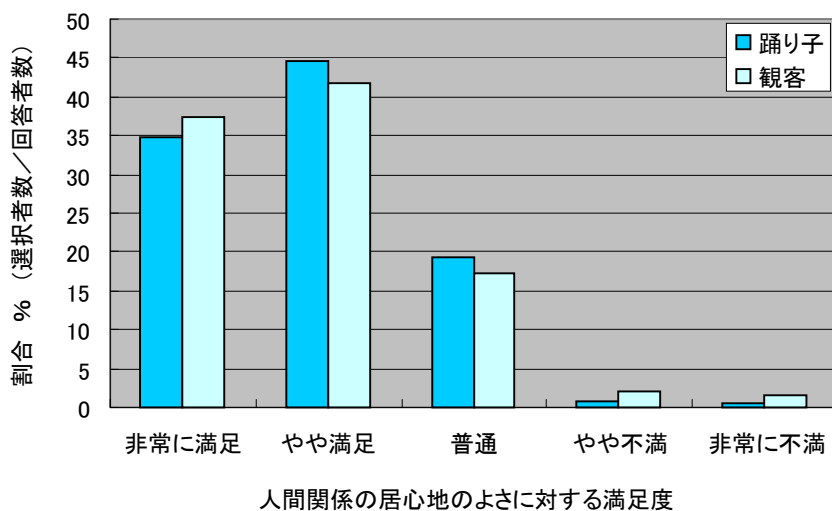


図 3-9 「居心地がよい」場所に対する満足状態

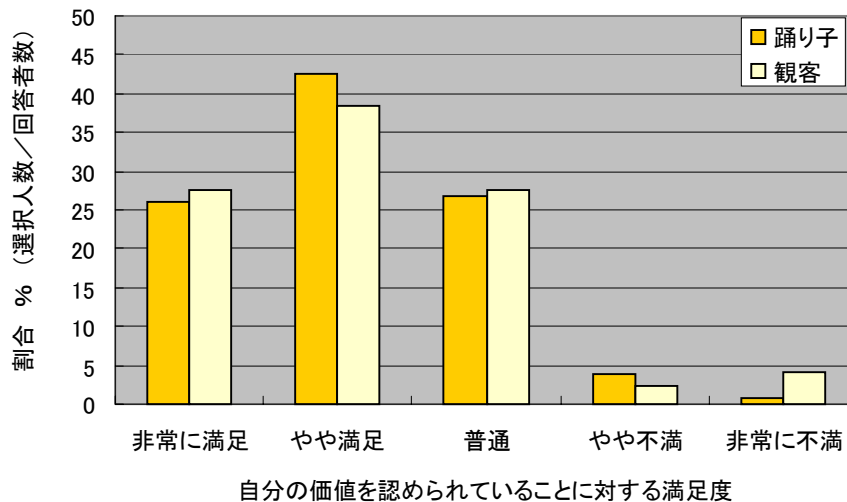


図 3-10 自分の価値を「認められている」場所に対する満足状態

これらの満足状態から二つのことが読みとれる。第一点は、「居心地がよい」についても、自分の価値を「認められている」についても、「不満」を抱いている人はほとんどいないということである。第二点は、「居心地がよい」に対する満足状態の方が、自分の価値を「認められている」に対する満足よりも全体的に高いことがあげられる。実際に、五段階の満足状態を得点化¹⁶して5点から1点に置き換えて、両者の平均満足度を計算した。すると、「居心地がよい」についての平均満足度は、踊り子が4.1、観客が4.02であり、自分の価値を「認められている」について、踊り子が3.89、観客が3.83であった。やはり、「居心地がよい」の満足状態の方が、自分の価値を「認められている」場所の満足状態よりも高いことが分かった。その違いについて、マズローの欲求階層論から説明できる。マズローの言う第三段階の「所属・愛の欲求」を「人間関係で居心地がよさを求めること」とし、第四段階の「承認の欲求」を「自分の価値を認められたいと思うこと」とする。それによれば、第四段階の欲求よりも第三段階の欲求の方が満たされている確立が高いことは容易に想像がつく。従って「認められている」よりも「居心地がよい」の満足度の方が高いことは理論的に間違っていない。

ここで、ひとつ解き明かすべき疑問を示す。「居心地がよい」の満足状態と、自分

¹⁶ 「非常に満足」5点「やや満足」4点「ふつう」3点「やや不満」2点「非常に不満」1点

の価値を「認められている」の満足状態について、踊り子と観客の差はなかった。しかし、その結果からは、YOSAKOI ソーラン祭りが踊り子の「居心地がよい」や自分の価値を「認められている」の満足に、どれほどの影響を与えたかを推測することはできない。なぜなら、それを明らかにするためには、踊り子が YOSAKOI ソーラン祭りをやる以前の「居心地がよい」と自分の価値を「認められている」の満足状態のデータと比較する必要があるからだ。つまり、現段階では、YOSAKOI ソーラン祭りによって満たされたからこそ、現在観客と変わらない満足度の状態になったと考えることもできるし、また、YOSAKOI ソーラン祭りがそれらの満足にはほとんど影響を与えなかったと考えることもできる。

3.5.2 居場所の満足と YOSAKOI ソーラン祭りの満足

3.5.1 で疑問のままとなった(1) YOSAKOI ソーラン祭りによって満たされたからこそ、現在観客と変わらない満足度の状態になったと考えることもできる。または、(2) YOSAKOI ソーラン祭りがそれらの満足にはほとんど影響を与えなかったと考えることもできる。この部分について、「踊り子は YOSAKOI ソーラン祭りに満足している」という視点と照らし合わせて考察する。

YOSAKOI ソーラン祭りの踊り子は、新しいことに挑戦して、新しい居場所を求めた人々である。そのような彼らは、踊り子になることで、YOSAKOI ソーラン祭りに対して満足している。満足とは満足を与えるものそれ自体のみが、欲求を満足させるのである(マズロー1970)。つまり、踊り子の満足は、踊り子が YOSAKOI ソーラン祭りで居場所を得たことを意味する。居場所を得て満足したのだと仮定すれば、先程の(1)推論が正しいことになる。

しかし、踊り子の居場所について振り返ってみると、(1)の推論の間違いに気づく。彼らは、選択縁(YOSAKOI ソーラン祭りを含む)以外の「選べない縁」において、A「居心地がよい」という指標と「認められている」という指標による評価が一致している「居場所」もつ傾向がある。だいたい一人の人間がいくつの居場所を持っているかということを考えると、多くの人々の居場所は、だいたい五個以内である(小沢2000)。それは、彼らの居場所が YOSAKOI ソーラン祭りだけではないと考えるのが妥当であることを意味する。また、満たされた欲求は、動機付け要因ではなく、事実上、存在しない、消失したものとみなすべきである(マズロー1987)。つまり、先程の二つの推論のうち(2)の推論が正しいことを意味する。

以上のことをまとめる。新しい居場所を求めた踊り子は、YOSAKOI ソーラン祭りに参加することで、その新しい居場所を獲得した。しかし、「居場所」における二つの側面である「居心地がよい」や「認められている」に対する満足状態は、観客と全

く同様である。それは、「新しい居場所が欲しい」という欲求には、単に「居場所がある」だけでなく、居場所が存在することを前提とした「別の欲求」が隠されていると考えられるのである。

3.5.3 YOSAKOI ソーラン祭りが与えた満足

「新しい居場所が欲しい」に含まれた「別の欲求」とは何であろうか。YOSAKOI ソーラン祭りでは、ほぼ 100%の踊り子が YOSAKOI ソーラン祭りに不満を抱いていない(図 3-11,図 3-12 を参照)。きっとそこには普遍的に誰もが望むような欲求があるはずなのである。

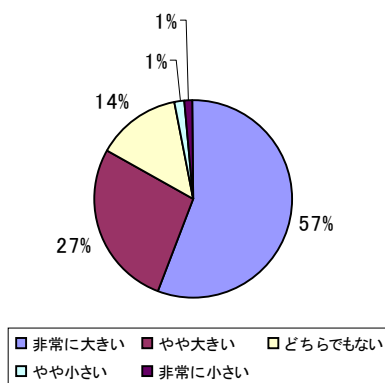


図 3-11 チーム入り直後の満足度

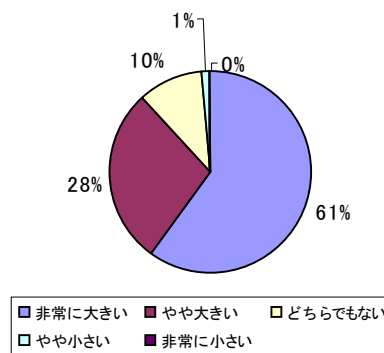


図 3-12 本祭後の満足度

ここで、欲求の概念に基づく一般的な動機付け理論である、マズロー（1954）の欲求階層論を参考にする。それによると、人の欲求とは、低次の飢餓を満たすような生理的欲求（第 1 段階）から、安全の欲求（第 2 段階）、所属・愛（帰属意識・愛情）の欲求（第 3 段階）、承認（認められたい）の欲求（第 4 段階）などという順に欲求は高次化し、最高次の欲求は「自己実現」の欲求（第 5 段階）であるというものである。そして、人間の欲求は、より低次の欲求が満たされて初めて、それより高次の欲求が生じ、さらに後者を満たすような動機付けが生じるものなのである。

そこで、今の踊り子や観客がおおよそどの段階に位置するかを検討する。3.5.1 の結果から、「居心地がよい」場所に対する満足や自分の価値を「認められている」場所に対する満足に対して不満を持っている人はほとんどいなかったことが証明されている。その結果と欲求階層論を対応させると、第 3 段階の所属・愛や承認の欲求と第 4 段階の承認の欲求に関して、程度の差こそあれ、多くの人々が、その段階の欲求に不満ではないといえるのではないかと推論が間違っていなければ、現代人の多くは

「自己実現」の欲求に向かって歩みはじめているといえる。「自己実現」とは、人の自己充足への願望、すなわち、その人が潜在的にもっているものを実現しようとする傾向をさしおり、この傾向はよりいっそう自分自身であろうとし、自分になりうるものすべてになろうとする願望である（マズロー1987）。つまり、「新しい居場所が欲しい」という欲求に含まれた「別の欲求」とは、「新しい居場所で自己実現をしたい」ということになる。そして踊り子は、YOSAKOIソーラン祭りで大いに「満足」している。それは、YOSAKOIソーラン祭りが彼らの「自己実現」の欲求に応えたといえるであろう。

確かに「居場所」という概念に、「自己実現」にあたる要素を含んだ定義をしているものもある。小沢（2001）は、エリクソンの記述の中に「居場所」という見方を見出し、彼の言葉を引用して居場所を次のように定義している。居場所というものは、自分の可能性を実現して、それを他者に認めてもらうことまたは認めさせることによって、得られるものである（小沢.2001）。ここで言う「自分の可能性を実現して」という部分こそが、マズローによる自己実現の定義である「その人が潜在的にもっているものを実現しようとする傾向」に対応すると推測できる。

3.6 YOSAKOI ソーラン祭りからの卒業

YOSAKOI ソーラン祭りが、いくら自己実現の可能な「居場所」を提供しようと、踊り子をやめていく人は後を絶たない。確かに YOSAKOI ソーラン祭りにおける踊り個数は増加している。しかしそれは、やめていく人よりも入って来る人の方が多いことを意味している。ここでは、踊り子がチームから去る背景を探る。

3.6.1 満足した気持ちの変化の様子

踊り子の満足度平均は、チーム入り直後に 4.35、今回の本祭後に 4.46 である。全体的に見れば満足度の下降は見られなかった。しかし、それは平均で見た結果である。実際に、個人レベルで見た場合はどのような気持ちの変化がみられるのであろうか。その様子を見るために、参加者をチームに所属した直後の満足度の大きさをグループ分けした。5つのグループ（非常に大きい人々、やや大きい人々、普通の人々、やや小さい人々、非常に小さい人々）において、本祭後に満足度はどのように変化したのか。各グループで、五段階の満足度の割合を求めた（図 3-13 を参照）。

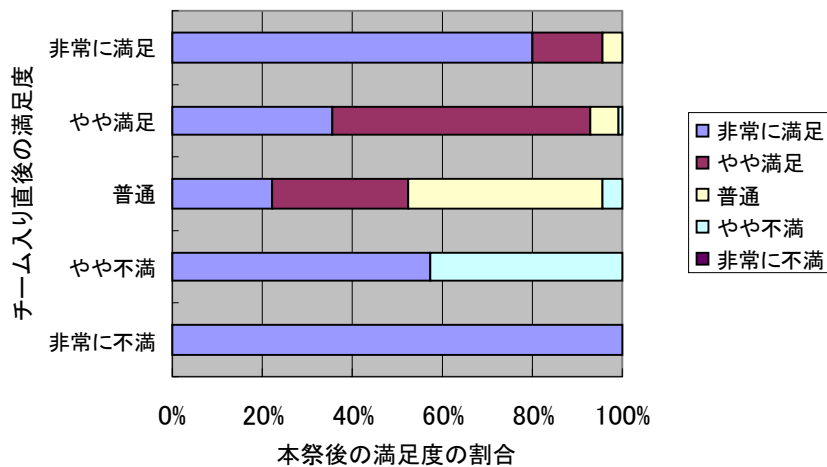


図 3-13 チーム入り直後と本祭後の満足状態の変化

その結果、本祭を経験しても満足度が変わらない人や、むしろ下がってしまった人もいることが分かった。つまり、(図 3-1)で示された平均満足度には、極端な変化は見られないが、実は内部ではさまざまな動きがあるのということである。

チームに所属した直後の満足度が「非常に大きい」グループのうち、20%が本祭の直後に、祭りに対する評価を下げた。同様に満足度が「やや大きい」グループでは、評価を上げたものが36%に対し、評価を変えなかったものが57%、評価を下げたものが7%いた。次いで、「普通」と答えたグループでは、52%の人が評価をあげたが、44%の人は評価を変えず、4%の人が評価を下げた。一方、「やや不満」のグループでは、評価をそれ以上下げたものはいなく、「非常に不満」のグループでは、全員が本祭の直後には「非常に満足」と答えている。

つまり、全体で見ると、本祭の直後であるにも関わらず、評価を下げたものは全体の13%で、また「非常に満足」グループ以外¹⁷で、満足度の変化が見られなかった人々は、全体の37%であった。平均満足度の上昇という数値の裏に隠れた、このような人々の存在に注目することは、この祭りがもつ機能の特性と関わりがあるかもしれない。

3.6.2 所属年数と祭り直後の満足状況

本祭の参加回数を重ねたこと、つまり、チームに所属する年数が増すことは、祭り直後に、祭りに対する評価が上がらない要因の一つではないか。そこで、チームに所

¹⁷ ここで「非常に満足」グループをのぞいたのは、「非常に満足」グループには、それ以上評価基準がないからである。

属した年数と本祭後の満足度の関係調べてみた（図 3-14 を参照）。

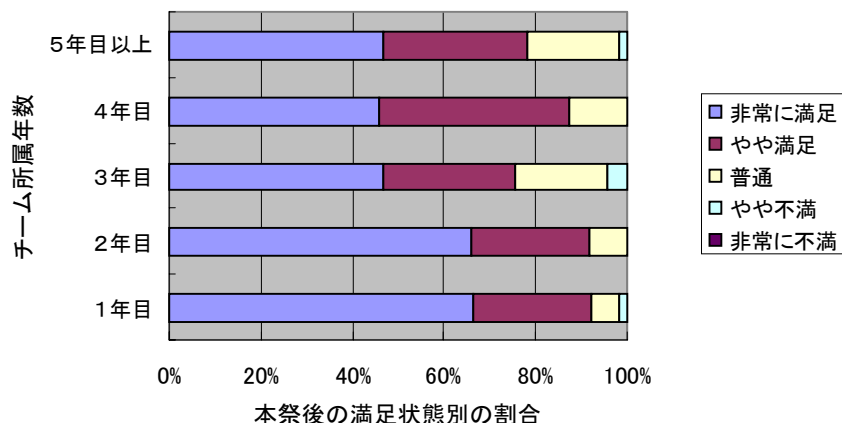


図 3-14 チーム所属年数と本祭後の満足度

チームに所属して2年目までは、祭りに対する満足度が「非常に大きい」と「やや大きい」の割合に変化は見られない。それは、祭りに対する評価がそれほど変わらないことを意味する。両者を合わせると全体の90%を越す。とても高い満足度である。ところが、所属年数が3年目の人々では、YOSAKOIソーラン祭りに対する満足度は、急激に変化する。それは、満足度が「非常に大きい」と答えていた人の割合が急激に減ったことによるものだ。そのため「非常に大きい」と「やや大きい」を合わせた割合が減少し約75%程度となる。かわりに「普通」と評価する人が増えた。そして4年目、一度減った「非常に大きい」と「やや大きい」を合わせた割合は、再び増加した。それはなぜか。これは、満足度を低くしても続けていた人々がチームから去っていったことによると考えられる。それを裏付けるものとして、今回のアンケートに答えてくれた一般チームの代表を務める方々から聞いた話がある。それによると、社会人チームの場合三年が踊り子を続ける限度であるらしい。その原因をチームの代表の方々はこう指摘する。それは「祭りと私生活の両立が金銭的にも大変になって、そのがんばりの限界が三年目という人が多いのだろう」というものだ。また、本研究で密接に携わった学生チームの場合は、一年限りでやめる人も多い。

選択縁の特徴、それは血縁、地縁、社縁とは異なり、加入と脱退が自由であるということだ。それは、本人にとってその場が必要である限り関わり続けることができ、一方で、必要ではないと感じたとき、いつでもその関係をやめられるのである。つまり、YOSAKOIソーラン祭りに対する満足度の低下が意味するものは、本人にとってその場がもはや必要なものではなくなったということなのだ。同時にそれはチームからの卒業という行動に現れる。

確かに、今回の調査対象となったチームの所属年数を見てみると、1年目～3年目という人で全体の87%、それ以降10年目までの踊り子をすべてあわせても全体の13%しかいなかった（図3-15を参照）。

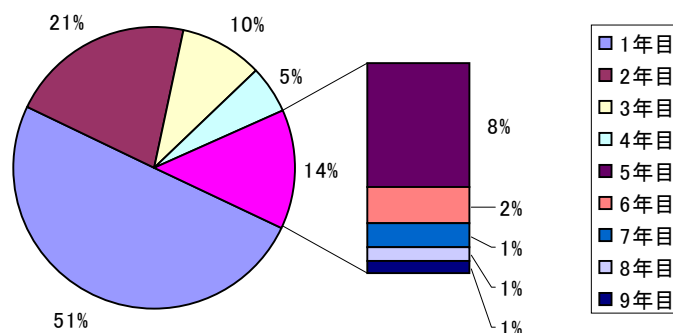


図 3-15 チーム所属年数の内訳

しかし裏を返せば、YOSAKOI ソーラン祭りには、その場を必要とするもののみが集まっているということになる。それこそ「純粋な関係性」が保たれているということになる。純粋な関係性とは、関係のための関係以外のなにものでもないことであり、その関係への志向性は「情緒」によって規定されている（大澤 1996）。つまり、「YOSAKOI ソーラン祭り」が、やめたいものがやめられる関係でなりたつ限り、そこに存在するみなのはなは一つであり続けるのだ。

3.6.3 所属年数と YOSAKOI ソーラン祭りに対する関心状況

YOSAKOI ソーラン祭りに対する関心の状況も、所属年数が増すに伴って変化する。どのように変化したのかというと、所属年数の増加とともに、YOSAKOI ソーラン祭りから他のものに関心に移った人の割合が増えるということである。

第10回本祭後の心境を、以下の内容で分類した。内容は「やっぱり YOSAKOI ソーラン祭りが一番である」、「他のことにも興味があるが、YOSAKOI ソーラン祭りが一番である」、「YOSAKOI ソーラン祭りと同じくらい他のことにも興味がある」、「他のことにも興味があり、YOSAKOI ソーラン祭りは一番ではない」、「すっかり他のことに興味がある」、「今は何にも興味がない」である。しかし、集計の際は回答者数が少なかったため「すっかり他のことに興味がある」、「今は何にも興味がない」は「その他」として取り扱った（図3-16を参照）。

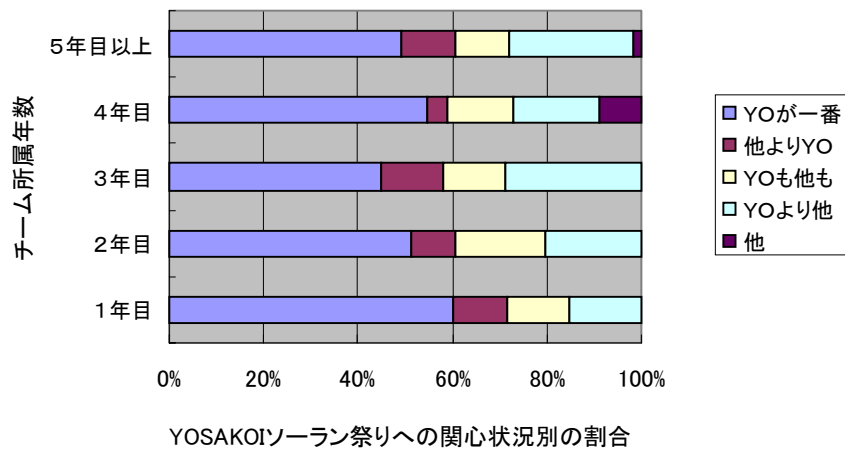


図 3-16 チーム所属年数と YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況

所属年数が1年2年3年と増すに伴い、「やっぱり YOSAKOI ソーラン祭りが一番である」を選択する割合は着実に減少し、一方で「色々なことに興味がある。その中で、YOSAKOI ソーラン祭りは一番興味のあるものではない。」を選択する割合が増える。このことは所属年数が増すことで、1年目の感動からさめ、YOSAKOI ソーラン祭り以外にも興味を示すようになってきたことを意味する。

ところが、所属年数が4年目を迎えると、「やっぱり YOSAKOI ソーラン祭りが一番である」を選択する割合が再び増加する。それは、現存する人々の満足度が上がったのではなく、先程の考察同様、3年目を境に YOSAKOI ソーラン祭りに対する満足度が低い人々がチームを後にするため、相対的に「やっぱり YOSAKOI ソーラン祭りが一番である」を選択する割合が増加するのである。つまり、ここでも3年目が、チームから脱退するかどうかの選択の時であることがうかがえる。

3.6.4 本祭後の満足と YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況

所属年数が長くなると、祭りで踊った直後の満足度は低下し、YOSAKOI ソーラン祭りに対する興味が他のことに比べて相対的に減少することが分かった。そこで、個人個人の YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況と、チームに所属した直後の満足度と第10回本祭後の満足度の変化を調べてみる（図 3-17 を参照）。

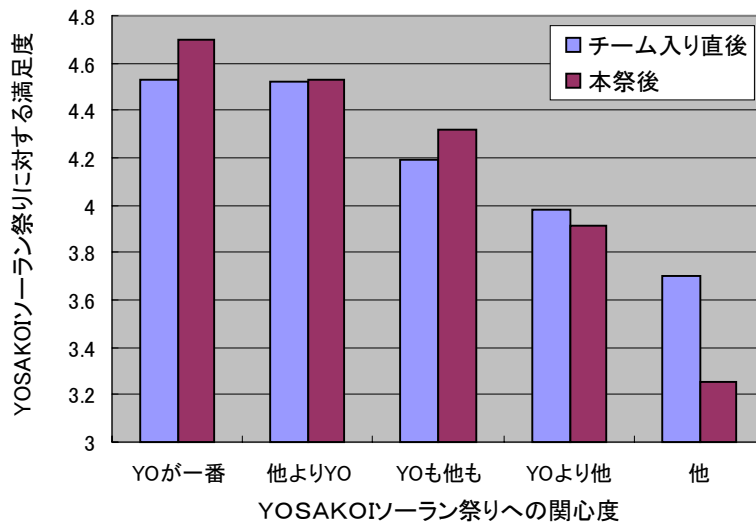


図 3-17 本祭後の満足状況と YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況

ここから二つのことが分かった。第一点目は、YOSAKOI ソーラン祭りに関心があるうちは本祭後の満足度はチーム入り直後の満足度よりも高くなるが、祭りへの関心が薄れた人にとっては、本祭を経験しようが満足度は下がっているということである。図 を詳しく見てみると「やっぱり YOSAKOI ソーラン祭りが一番である」、「他のことにも興味があるが、YOSAKOI ソーラン祭りが一番である」、「YOSAKOI ソーラン祭りと同じくらい他のことにも興味がある」と答えたグループは、本祭後に満足度の上昇が見られた。一方で、「他のことにも興味があり、YOSAKOI ソーラン祭りは一番ではない」、「その他」と答えたグループでは、たとえ本祭で踊った後であろうとも、祭りへの満足度が減少していることが分かった。

第二点目は、YOSAKOI ソーラン祭りよりも他のことに興味をもつようになると、YOSAKOI ソーラン祭りへの満足度は徐々に減少してくることである。つまり、「やっぱり YOSAKOI ソーラン祭りが一番である」というグループよりも「他のことにも興味があるが、YOSAKOI ソーラン祭りが一番である」のグループの満足度のほうが低く、さらに「YOSAKOI ソーラン祭りと同じくらい他のことにも興味がある」のほうがより低く成るといった具合である。

以上のことをまとめると、所属年数が長くなった人には、YOSAKOI ソーラン祭り以外に関心を示す傾向が見られ、それがその後祭りに対する満足度を下げていると推測できる。そして満足度が下がったことが、チームから脱退することを促すのだ。その際、他に関心が移ることを、他に自分の「居場所」を見つけたと考えることもできるのではないかと。つまり、YOSAKOI ソーラン祭り以外に「居場所」をもつことが、相対的に YOSAKOI ソーラン祭りへの関心を低くしたといえるであろう。

しかし、YOSAKOI ソーラン祭りには、チーム入り当初から低い満足度存在し続けている踊り子もいる。そこで、チーム入り直後と第 10 回本祭後の満足度の変化と YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況に相関があるかどうかを調べた。すると、そこには相関があった (p 値 < 有意水準 0.01)。(表 3-4) に検定結果をまとめる。

表 3-4 「チーム入り直後」と「本祭後」の満足度の変化 と
YOSAKOI ソーラン祭りへの関心状況 について

満足度の変化	YOが一番	他よりYO	YOも他も	YOより他	他
かなり上がった	///	*			
やや上がった					
「非常に満足」で一定	**		///	///	/
「やや満足」で一定	///		**	*	
「ふつう」で一定	///			**	*
「やや不満」で一定	///			**	
やや下がった	///	**		**	

(「*」と「/」については、P. 37 を参照)

ここでは、チーム入り直後と本祭後の満足に変化が見られなかった人々のうち「ふつう」や「やや不満」と答えた人に注目する。彼らは低い満足度を保ちながらも、チームから脱退せずに踊り子として存在する。彼らにとって YOSAKOI ソーラン祭りとはどんな位置づけの関心対象なのであろうか。(表 3-17) から、彼らにとって YOSAKOI ソーラン祭りは他のことよりも関心があるものではない傾向が強く見られた。つまり、はじめから YOSAKOI ソーラン祭りを一番と考えない人の中には、いくら満足度が低かろうがやめるという決断には至らない場合があるということである。つまり、自分にとって必要な場所でもなくとも踊り子として存在し続けている人もいることが分かった。ただし、その場合は YOSAKOI ソーラン祭りを一番と考えるのではなく、他に自分の関心のある場所、つまり自分の「居場所」なるものがある人である。

3.6 YOSAKOI ソーラン祭りが与える満足

YOSAKOI ソーラン祭りの魅力は、本祭だけでなく、本祭に至までのプロセスにある。プロセスとは、チームに所属すること、次は本祭へ向けて活動すること、それら一連の過程である。そのプロセスを経て、なおかつ本祭に参加することで、多くの踊り子の「自己実現」の欲求は満たされ、満足という感情が残る。そして、己の欲求が満たされたという気持ちが、踊り子の主体的な参加を維持していると推測できる。し

かし、踊り子の欲求を満たす満足は長続きしない。全体的に見ると、所属年数が増し、本祭への参加回数を重ねると、祭りへの関心度は下がる。そのような人々にとって、本祭の経験はYOSAKOIソーラン祭りへの満足度を上昇させない傾向にあることがわかった。そのため、個人的に満足という気持ちを得られなくなったとき、人々はYOSAKOIソーラン祭りから身を引くと考えられる。

大澤(1996)は次のように述べている。「『個人的なものの領域¹⁸』の基盤には、『純粋な関係性¹⁹』への志向性がある。関係のための関係、相互に選択しあう関係はその関係から何かを引き出しうる限り、つまりその関係が自分(のアイデンティティ)にとって重要である限り、続けられる。逆に言えば、その関係から何も得られなくなれば、その関係が自分にとって重要だと思わなくなれば、いつだって解消することができるのだ。いつでも解消できると言うことが『純粋な関係性』が純粋であることの証でもある。」つまり、YOSAKOIソーラン祭りで己の欲求を満足した踊り子が、自分の意志でチームから脱退していくことは大澤(1996)の言う「純粋な関係性」が保たれているということになる。

また、YOSAKOIソーラン祭り以外の場所に興味が出てきたことと、YOSAKOIソーラン祭りへの満足の低下は、次のようなことを示唆している。自己実現の欲求を満たした踊り子は、また新たに自己実現の欲求を満たすことのできるような「居場所」を求めようになる。その様な欲求は、欲求の度合いが大きくなるに従って、相対的にYOSAKOIソーラン祭りに対する満足状態を低下させるのだ。つまり、YOSAKOIソーラン祭りが与える満足というものは、他の場所でも得られる満足なのである。

そして麻布(1993)は言う。「自己実現に関連して大切なことは、様々な体験をすることである」と。つまり、自己実現の欲求を満たす自分の居場所とは、過去から現在を通り未来へと向かって描かれる軌跡にそって、たえず変化しながらも把握され位置づけられていくものなのだ。だから、未来への志向性なしに「自分の居場所」を決定することはできない。したがって、その時点で自分が「居場所」であると認識する関係は、あたかも永遠に持続するかのようにも立ち現れることとなる。しかし、その持続のための関係を志向してしまえば、それはもはや大澤(1996)の言う「純粋な関係」ではなくなってしまうのである。

3.7 おわりに

¹⁸ 「情緒」という内面的な欲求にのみ基づいて切り結ばれる関係のこと

¹⁹ その関係のためのみに切り結ばれる関係のこと。つまり、その関係を維持していくことが情緒的な満足を引き出しうる限りにおいて、お互いその関係を選び続けるときに成立する関係性。

この章で明らかになったことをまとめると、以下の四点に集約される。

第一に、YOSAKOI ソーラン祭りに対する踊り子の満足状況の分析から、踊り子にとって YOSAKOI ソーラン祭りは自分の「居場所」となっているのではないかという推測をした。

第二に、「居場所」という観点から、踊り子と観客の社会心理的背景の違いを見出した。その際、居場所の存在を「居心地がよい」と「認められている」にわけて検討した。それによると、踊り子の血縁、地縁、社縁における居場所は、主観的評価と客観的評価が一致しているところに存在し、一方観客の居場所はそれらが一致していない所にあった。その違いが「新しい居場所がほしい」という欲求が芽生えるか否かの境界線となった。

第三に、YOSAKOI ソーラン祭りが、踊り子に対してもたらした満足は、新しくできた居場所において「自己実現」の欲求が満たされたことによることが分かった。つまり、YOSAKOI ソーラン祭りは、踊り子にとって「所属・愛」「承認」さらに「自己実現」の欲求も満たす居場所であった。

第四に、チーム所属年数が長くなったことで、YOSAKOI ソーラン祭りへの関心は低くなり、それと同時に、YOSAKOI ソーラン祭りに対する満足度が低下する傾向が見られた。その経過をたどった踊り子がチームからの卒業していくのである。

第4章 結論

4.1 はじめに

本章では、まず、本研究の着眼点である「居場所」について論じ、その後、リサーチ・クエスチョンにそって事例分析から得られたことを述べ、次に本研究における理論的含意と実務的含意を論じ、最後に将来への展望として、これから取り組むべき課題を提示する。

4.2 事例分析から得られたこと

4.2.1 「居場所」という視点

踊り子と行動を共にし、彼らの様子を観察していると、YOSAKOIソーラン祭りは多くの踊り子にとって、単なる娯楽ではなく、彼らの生きがいであり、まさにそこには彼らの「居場所」があるのではないかとすることに気付く。ここで言う「居場所」とは、単なる物理的空間のみを指すのではない。例えば「自分の部屋はあるが、家の中に自分の居場所はない」というように、むしろ心情的な部分が色濃い空間なのである。このような居場所は、「自分探し」の場や(田中 2000)、アイデンティティを感じる場と言われる(小沢 2000)。そこで、「居場所」と人間の基本的欲求(マズロー1987)を照らし合わせると、居場所が満たすことのできる欲求は、「所属・愛の欲求」はもちろんのこと、それを超えたものであることが予想される。

本研究では、そこで「居場所」を「他者との関係の中で、自分らしく居られると感じる生活空間」として扱い、それを切り口として、リサーチ・クエスチョンへ回答を試みた。その際、どの段階の基本的欲求(マズロー1987)を満たすと、本人が「居場所である」と感じるのかに注目した。また、居場所の特徴として、1)本人が実感できるところに成り立つ、極めて個人的なものであること、2)他者と自分との相互承認という関わりにおいて生まれること、3)居場所が成立する空間や種類も多様であることが挙げられる(西村 2001,萩原 2000)。

4.2.2 「居場所」ができるところ

「居場所」はどこにできるのか。それは、本人が「居場所」として実感できるところにあり(萩原 2000,西村 2001) また他者と自分との相互承認という関わりにおいて生まれる(萩原 2000)。この二つの性質を踏まえて、本研究では、本人が「居場所がある」と感じることを二つの軸から考えてみた。一つは、人間関係で「居心地がよい」と感じる場合と、もう一つは、他者により自分の価値を「認められている」と感じる場合である。また、それら二つの指標は、人間の基本的欲求(マズロー1987)における「所属・愛の欲求」と「承認の欲求」に各々対応していると推測される。

4.2.3 踊り子の「居場所」と観客の「居場所」の違い

「居場所」とは生活空間を指す。そこで、その居場所があると感じる空間を「縁」という概念を用いて区別した。縁は、血縁、地縁、社縁、選択縁の四つに分類されている。血縁、地縁、社縁を「選べない縁」とするのに対し、選択縁は社会における「選べる縁」の全てを指している。

そしてまず、踊り子または観客が、「居心地がよい」と感じる縁と、「認められている」と感じる縁がどれであるかを調べる。次に、その集計結果をもとに、各縁に対して彼らが「居心地がよい」と感じている割合と、「認められている」と感じている割合を求めた。そして、二次元空間において、横軸を「居心地がよい」と感じた人の割合、縦軸を「認められている」と感じた人の割合とした。そして、各縁ごとに、「居心地がよい」と感じている人の割合を縦軸の値とし、「認められている」と感じる人の割合を横軸の値として、その座標をとった。

その結果、踊り子は、血縁、地縁、社縁において「『居心地がよい』という指標と『認められている』という指標による評価が一致している居場所」を持っていることが分かった。また、観客は、血縁と社縁においての「『居心地がよい』という指標と『認められている』という指標による評価にズレがある居場所」をもつ傾向にあった。つまり、「選べない縁」において居場所がどのように評価されているかが、「選択縁」に関わるか関わらないかの大きな分かれ目になったと推測できる。

4.2.4 踊り子として「祭り」に参加するのはなぜか？

まず始めに、居場所が成立する空間や種類は多様であり(西本 2000) 一般的に「居場所」は一つではなく、大抵の人は五つ以内の「居場所」を持つとされていることを確認して(小沢 2000) この問の回答にはいる。

踊り子は、「選べない縁」において、「居心地がよく、認められている」居場所をもっていた。つまり、その居場所は、「所属・愛の欲求」と「承認の欲求」を同時に満たしていた。「所属・愛の欲求」と「承認の欲求」について不満と感じている人は各々一割に満たないので、踊り子の中には「自己実現の欲求」があるとみなせる。そして、「所属・愛の欲求」と「承認の欲求」を同時に満たされていることで、踊り子は、観客以上に、執拗に「自己実現」に執着していたことが伺える。そして、彼らはそこにとどまって、次の欲求である「自己実現」を目指そうとはしなかった。それは、彼らが、既存の居場所では自己実現が図れないと感じたためであろう。その諦めが、彼らの目を、新しい居場所へと向けた。確かに、彼らが踊り子になろうとしたきっかけは「新しいことに挑戦したい」であった。

これらの事実から、踊り子は「選べない縁」における「居場所」で、「所属・愛の欲求」と「承認の欲求」が同時にほぼ満たされたことが、観客よりも「自己実現の欲求」を強く持たせることとなった。つまり、「所属・愛の欲求」と同時に「承認の欲求」についてほぼ満たされたことで、「他者との関係の中で、自分らしく居られると感じる生活空間」、つまり彼らにとっての「居場所」は、「自己実現の欲求」をも満たすものでなければならなかった。そのような欲求を持っているときに、YOSAKOIソーラン祭りという選択縁を目の当たりにし、彼らは踊り子となったのである。

4.2.5 観客として「祭り」に参加するのはなぜか？

では、観客はなぜ踊り子にはならないであろうか。そこで、観客と踊り子には趣向の違いがあるのではないかと、両者が日々積極的に取り組んでいることに注目した。ところが、そこに相違は見られなかった。踊り子の方がよりスポーツ等を好む訳でもなく、観客の方がより趣味的活動が多いわけでもなかった。そこで、観客がYOSAKOIソーラン祭りに対してどのような感情を抱いていたかを調べた。それによると、祭りに「是非参加したい」と思うものは全体の28%で、「参加したい」が18%で、「どちらでもない」は28%と、つまり、観客の4分3の人は祭りに対して否定的ではなかった。以上のことからでは、観客が踊り子にならない理由が見出せなかった。

そこで、観客にとっての選べない縁における「居場所」は、「居心地はよいが認められてはいない」と感じる、また「認められてはいるが居心地はよくない」と感じる傾向をもつのである。それは「所属・愛の欲求」と「承認の欲求」の満たされかたに偏りがあるということである。ただし、「所属・愛の欲求」と「承認の欲求」について不満と感じている人は各々一割に満たないので、観客の中には「自己実現の欲求」があるとみなせる。しかしそれは、踊り子よりも「自己実現」の欲求に対する執着心がなかったと推測できる。そこで、彼らは既存の「居場所」で、満足を感じながら、

そこにとどまり、現状を生きることに努めているのである。しかし、新しい居場所を求めないことが「自己実現の欲求」を持っていないことにはならない。なぜなら、選べない縁、特に社縁において自己実現の欲求を満たすことは可能だからである。特に若い世代のものは、「自己実現」という視点をもって職場選びをする人が増えている（西川他 251）。要は、彼らには、選択縁を選ぶまでもなく、自分の可能性を実現し、自分らしくいられると感じる「居場所」があるため、観客でいると推測される。

その傾向は以下二点からも伺える。第一に、観客が祭りに参加しない最大の原因は、現在の生活の忙しさを物語る「仕事や家事が忙しくて時間がない」ということである。第二に、YOSAKOI ソーラン祭りを目の前にして彼らが思うことは、「新しいことに挑戦したい」ではなく「ストレス発散・気分転換」や「仲間と共に認められたい」という、現状の生活を変えるのではなく、その生活の不満を違う場所にぶつけようという傾向が強かった。彼らに新しい何かに挑戦したいという欲求がよりも、今の居場所を生きることこそ望まれることなのである。

4.2.6 踊り子をやめるのはなぜか？

YOSAKOI ソーラン祭りの縁は「選択縁」に属する。そして「選択縁」への加入や脱退は、すべて本人の自由である。その自由は、「踊り子をやめたい」という意志を存分に尊重することとなる。確かに、不満を抱えた踊り子はほとんどいなかった。つまり、不満を持った時点で、踊り子は踊り子であることをやめるのであろう。では、どんな時に、踊り子をやめたいと思うのであろうか。その答えは、YOSAKOI ソーラン祭りが自分の「居場所」ではなくなった時である。

一般チームのメンバーは3年を周期に大きく入れ替わると言われている。本研究でもその傾向は見られた。実際、所属年数が三年目に至るまでは、祭りに対する満足度は所属年数の増加に伴い低下し、また、祭り以外のことに関心を示す割合も高くなっていった。しかし、三年をすぎると、それらの傾向は落ち着く。

つまり、三年を境に、踊り子が二つのタイプに別れることが推測できる。一方は、踊り子でいることを自分の「居場所」、つまり「自分の可能性を実現し、自分らしくいられると感じる生活空間」ではないとするタイプである。その背景には、集団としての目標を追うあまり、自分らしさが犠牲になってしまい、その結果「居場所」とは感じられなくなった踊り子も少なくない。そのような踊り子は、しだいに他の居場所を見つけたいという欲求とともに、YOSAKOI ソーラン祭りから卒業する人々である。もう一方は、踊り子であることが自分の「居場所」、つまり「自分の可能性を実現し、自分らしくいられると感じる生活空間」であると、そのまま踊り子としてチームに残る人々である。従って、所属年数が三年を過ぎてから人々の満足度状態など

の落ち着きは、YOSAKOI ソーラン祭りが自分の居場所ではないと判断した人が、踊り子をやめたことによるものだと推測できる。

人は、自分にとってふさわしい場所を見つけるまでは心安らかにはなれないのである（エリクソン 1959）。すなわち、三年を前にやめてしまった踊り子にとっては YOSAKOI ソーラン祭りが、彼らにとってまさに適した「居場所」ではなかったことを意味する。また、このように自分の居場所ではないと判断

4.2.7 この祭りはどのような社会心理的機能をもっているか？

踊り子は、踊り子になることで YOSAKOI ソーラン祭りという新しい「居場所」を獲得した。また、踊り子の YOSAKOI ソーラン祭りに対する満足度は、チーム入り直後に既に高い値を示し、その時点で不満であると答えた人は全体の 2%であった。また、その高い満足度は続き、祭り直後で不満であると答えた人は全体の 1%である。

しかし、その満足度の高さをもたらした直接の要因は、新しく「居場所」を獲得したことではなかった。それは、新たに獲得した「居場所」において彼らがある欲求を満たしたことによるものであった。

「居場所がある」ことに対する観客の満足状態と、踊り子の満足状態に、有意差は見られなかった。つまり、YOSAKOI ソーラン祭りはそれらの満足状態に影響を与えていないことになる。その原因として考えられることは、踊り子には既に「居場所」があったということである。つまり、「居場所」を新しく得たところで「居場所がある」ことに対する満足度に変化が見られないと推測できる。以上のことから、踊り子が YOSAKOI ソーラン祭りで得た満足は、それらとは異なる欲求なのである。

その欲求の正体を突き止めるため、マズローが提唱した欲求階層論を参考に、人が基本的に求める欲求に注目する。まず、「居場所」に対する満足と、欲求の階層を照らし合わせる。「居場所」に関して『居心地がよい』という満足をもたらす欲求は、第三段階の欲求「所属・愛の欲求」であると考えられる。また、『認められている』という満足をもたらす欲求は、第四段階の欲求「承認の欲求」に相当すると考えられる。その対応関係から踊り子の欲求の段階を推測すると、彼らは基本的欲求の第三、第四段階の欲求については、ほぼ満足した状態にあると推測できる。なぜなら、「居心地がよい」満足度と「認められている」満足度に関して、不満であるとしている人は全体の一割に満たなかったからである。また、これらの満足状態について、踊り子と観客に差は見られなかった。

マズロー（1970）は、基本的欲求において「欲求とは通常、優勢な欲求が満たされた時のみあらわれ、満たされた欲求はもはや欲求ではなくなり、人は満たされない欲求だけによって支配される」と指摘している。つまり、第四段階まで満足している彼

らには、次の欲求である第五段階の「自己実現の欲求」が芽生えていると推測できる。つまり、彼らの満足は「自己実現」(ゴールドシュタイン 1939, マズロー1970)の欲求をも満たす「居場所」に身を置くことから得られたものなのである。

まとめると、YOSAKOIソーラン祭りの社会心理的機能は、「自己実現の欲求」まで満たす「居場所」を提供することであり、それは、自分の可能性を実現し、自分にとってふさわしいと思える場を見つけ続けていこうとする人々の「受け皿」としての機能するのである。

4.3 リサーチ・クエスチョンとその答え

以下に、メジャー・リサーチ・クエスチョンと3つのサブシディアリー・リサーチ・クエスチョンを示し、各々について簡潔に答えを示す。

「YOSAKOIソーラン祭りは、どのような社会心理的機能を持っているのか？」

この祭りは、踊り子に、「自己実現の欲求」まで満たす「居場所」を与える社会心理的機能を持っている。ただし、年月がたつにつれて、そこを「居場所」とし続ける踊り子と、他に「居場所」を求める踊り子に別れる傾向が見られた。

1)「踊り子として祭りに参加しているのはなぜか？」

既存の「居場所」では満たしきれない欲求を「新しい居場所」に求めたからである。

2)「観客として祭りに参加しているのはなぜか？」

観客には、自分の欲求を満たすことのできる「居場所」が存在していたからである。

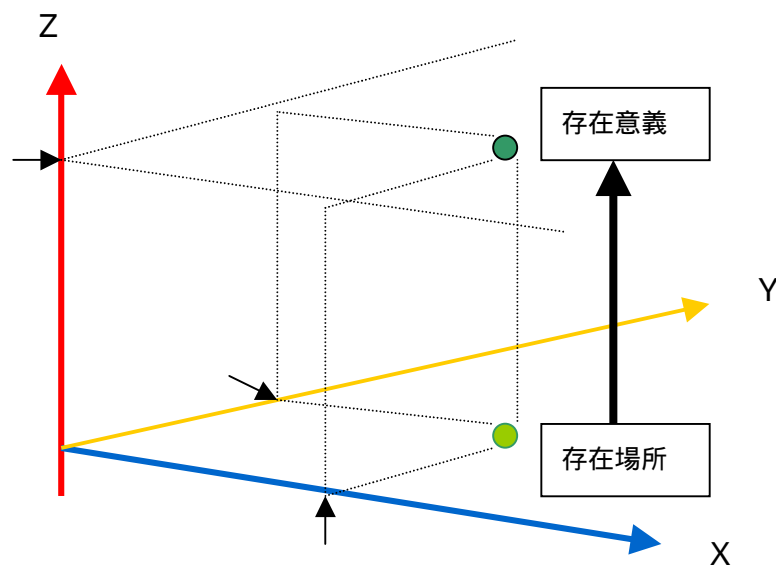
3)「踊り子をやめるのはなぜか？」

YOSAKOIソーラン祭りが自分の「居場所」であると感じられなくなったためである。

4.4 理論的含意

本研究では、「居場所」を主観的評価と客観的評価の交わりに位置づけてきた。その際、常に「居場所」は二次元の世界で評価された。しかし、それはただ単に「どこに(どんな評価をされているところに)居場所があるか」という「存在」を示したに過ぎなかった。ところが、本研究の結果により、現代人の多くが「自己実現」という欲求をもっていることが分かった。また、一個人が認識する数ある「居場所」が全て当人にとって「自己実現」を満たす場ではないこともわかった。つまり、「居場所」と一括りに認識されるものでも、各々は実は異なった性質をもつのである。

そこで、二次元空間で「存在」のみを示していた「居場所」について、「自己実現」という指標を取り入れた三次元空間で表し、より「居場所」という概念に忠実に評価できる方法を考えた。そのことにより居場所の「存在意義」をも取り入れた評価ができるようになる。つまり、これから「居場所」を評価する際には、第一軸を「居心地がよい」場所と感じる人の割合、第二軸を自分の価値を「認められている」場所と感じる人の割合、そして第三軸を「自己実現が図れている」と感じる人の割合としてとらえることとなる。



- X軸：その場を「居心地がよい」と感じる人の割合
- Y軸：その場で自分の価値を「認められている」と感じる人の割合
- Z軸：その場で「自己実現が図れる」と感じる人の割合

図 4-1 「居場所」の評価

ところで「居場所」を評価の対象とするのはなぜか。それは、人々が求める居場所を社会に提供するためである。そのためには、どのような場が求められているのかを明らかにすることや、求められている機能を備えた場はどこにあるのか、また創り出すにはどうしたらよいか等を考える必要がある。その際に「居場所」を評価する指標が欲しいのである。

しかし、なぜ「居場所」を社会に提供する必要があるのか。それは、人は居場所を得ることによって、アイデンティティの感覚を持つことができる(小沢 2000)からである。つまり、新しい居場所を得ることは、新しいアイデンティティの感覚を持つこ

となのである。しかし、現代のような常に変化する社会の中では、一度居場所を得てアイデンティティが確立されたからといって安心できるわけではない。人と人の関わりによって発達していく自己の確認作業は、常に社会との位置関係を確認めながら行わなくてはならない（岡本 1997）。子ども達の中でも、自分の部屋はあっても自分の「居場所がない」という子がいる（田中 2001）。従来ならば自分がある程度の方向性を決めた後は、社会の状況や自分との関係などあまり考えなくてもよかったのだが、今は関係性の確認作業が必要なのである（田中 2001）。また、そうしないと人々は不安に陥る。そのような不安を取り除くためにも、新しく「居場所」となりうる場所を提供することが求められている。人は「居場所がある」と実感出来たとき、安心して生きることができるのである。

4.5 実務的含意

YOSAKOI ソーラン祭りの社会心理的機能は、自己実現までの欲求の階層を満たす「居場所」の提供である。そのような機能をもった「祭り」に現代社会の人々は引きつけられる。この事実から、以下の三点が推測できる。第一に、現代社会には「自己実現」の欲求を満たす「居場所」を求めている人が多く存在すること。第二に、それらの欲求を満たす場には主体的に人が集まること。そして第三に、その様な場を社会に新しく創り出すことが可能であることである。

それらを踏まえると次のようなことが言える。現代社会を生きる人の主体的・積極的な参加が望まれる場を設けるためには、自己実現の欲求を満たすような場を提供することが有効である。また、実際に現代社会には自己実現の欲求を満たすことに飢えている人が多いのである。

そして、その主体的・積極的な社会への参加は、人々の内に秘められた知的財産を社会に埋もれさせるという事態を回避することにもつながる。実際、世の中には学問的な分野では補いきれない知識が存在する。それは、人々にとって最も生活に密着している多様性に富む知識である。それらの知識は、自分にとって有効でも、他人にとって有効であるとは限らない。すなわち、個人に依存した知識なのである。しかし、そのような知識こそ社会の中でより多くの人々が心豊かに生きることに関与する「知識」なのではないだろうか。しかし、今の社会はそのような知識の獲得にとって、いい環境を整えているとは言い難い。なぜなら、世の流れは、人々が出会い生活空間を共有する場を失う傾向にあるからである。

そこでまずは、社会の中で互いの知識を共有する場を設ける必要がある。しかも、知識創造のコンセプトから考えると、その場は人々が主体的に関わり合うような場であればならない。そこで本研究では、社会の中に「自己実現」までの欲求を満たす

ような場を創り出すことを提案したい。また、その場がより社会のために有効に機能するためには、どのような自己実現の場であることが望まれるのかを考察する。

まず第一点は、それが現実世界における自己実現の場であること、二点目は選択縁における自己実現の場であること、そして三点目は文化的な自己実現の場であることである。それらの視点の重要性について以下に述べる。

(1) 現実世界での自己実現であることの利点

自己実現の欲求を満たす場は、現実世界であるべきである。確かに、バーチャルな世界、特にインターネットの世界などで自己実現を図ることができるだろう。しかし、現実世界における自己実現を推奨するのは以下の理由からである。

知識創造プロセスの出発点は暗黙知の共有である。その暗黙知の共有のためには、個人が直接対話を通じて相互に作用し合う場が必要である(野中・竹内 1996)。つまり、実際に人と人が生活している実感を共有することが知識創造にとって重要なのである。すなわち、インターネットなどの仮想空間で自己実現を図ることは、社会における暗黙知の共有を阻害する可能性があるのである。

(2) 選択縁における自己実現であることの利点

YOSAKOI ソーラン祭りは選択縁からなる集団である。なぜ選択縁における自己実現が望まれるのか。社会では現在、職場での自己実現を望む人が増えている。それが可能ならば、それは大いに望まれることではある。しかし、それは万人にとって可能な方法ではなく、また、職場での自己実現の場合、職場を退くと同時に自己実現の場だけではなく、自分の居場所すら失う恐れがある。また、一方で、選択縁は他の縁とは異なり、「加入と脱退の自由」が特徴である、そのために、その団体への満足度が低くなれば脱退することができる。それは、その団体が所属する人々の高い満足度で維持されることになる。以上二点を踏まえたことで、敢えて選択縁における自己実現を支持する。

つまり、選べない縁における自己実現に執着するよりも、選択縁において自分の居場所をたくさんつくることは、アイデンティティの確立という点からみても望まれる生き方であると考えられる。なぜなら、選択縁においてたくさんの「居場所」をつくることで、一つの縁での失敗が、その人の全人格をも否定することがないからである。特に、景気の先行き不安、終身雇用体体制の崩壊などで象徴されるように、社会に期待ばかりしてはられない世の中である。そのような時代の中で、社会の中の自己をしっかり維持し続けるには、加入も脱退も自由な選択縁において、自分の力で自分を確認しながら生きる必要があるのである。

(3) 文化的な面を生かしての自己実現であることの利点

YOSAKOI ソーラン祭りは、踊りの中に地域の文化を取り入れることで、それを他地域へ向けて存分にアピールすることに成功した。それは、その地域のつながりを強めると同時に、その地域の活性化に大きく貢献した。

すなわち、地域としてのまとまりをつくり、地域ぐるみでより多くの人々の関わりを求めるためには、「文化」という、地域ごとに多様性を見せるものを軸として、他地域との相互理解を図る試みが役に立つのである。そして、地域の文化を外の世界に向けて発信していくことは、地域の中だけでなく、新たなネットワークを生む方法なのである。

21世紀は地方の時代であると言われる。その時代の波に乗るためには、人々は地域の独自性をアピールしていく必要がある。その手段としての「イベント」をメディアとして用いて、様々な地方独自の取り組みを発信する手段としてはどうだろうか。その際、それらのイベントが一過性のものではなく、その地に根付き、さらに発展していくためにも「文化」という軸で自己実現を測ることができることが望まれる。

4.6 将来への展望

本研究では、自己実現の欲求を満たす場を創り出すことの必要性和、どのような視点を盛り込んだ場を創ればいいのかを示すことができた。しかし、それを実践に移さなければ意味がない。そこで、今後の課題としては、現在の社会の仕組みとどのような連携をとって実践に移せばよいのか、また、現在の仕組みとは関係なく実践に移したときの障害はあるのか、等を検討していくことがあげられる。

参考文献

- 阿南透他(2000)「祭りの旅」旅の文化研究所研究報告 No.9 pp.41-63.
- 芦田哲朗(2000)『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社
- バーガー, P.L.&ルックマン, T. (1977)山口節朗訳『日常世界の構成』新曜社
- カイヨワ, R. (1974) 秋枝茂夫訳『戦争論』りぶりあ選書
- デューイ, J.&ミード, G.H. (1995)河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社
- 遠藤辰雄編(1981)『アイデンティティの心理学』ナカニシヤ出版
- エヴァンズ, R.I. (1981)岡堂哲雄・中園正身訳『エリクソンは語る～アイデンティティの心理学～』新曜社
- フレイジャー, R.&ファディマン, J. (1991) 吉福伸逸監修『自己成長の基礎知識 2-身体・意識・行動・人間性の心理学』春秋社
- フロム, E (1977) 佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊国屋書店
- 軍司貞則(1996)『踊れ! YOSAKOI ソーラン祭りの青春』文藝春秋社
- Goldstein, K(1939) *The organism*. New York: American Book
- 八王子いちょう祭り祭典委員会編(2000)『八王子いちょう祭り大作戦』日本地域社会研究所
- 萩原健次郎(2001)「子供・若者の居場所の条件」田中治彦編(2001)『居場所の構想』pp.44-45.
- 長谷川岳(2000)「北のカーニバルは絶えず進化する」(社)日本イベント産業振興協会編『イベント白書 2000』 pp.30-35.
- 長谷川芳典(1999)「スキナー以後の行動分析学(7): 生きがい論のしくみ」岡山大学文学部紀要 32 pp.68-80.
- ホール, C.M. (1996)須田直之訳『イベント観光学』信山社出版
- 原岡一馬(1990)『人間とコミュニケーション』ナカニシヤ出版
- ホブズボム, E.& レインジャ, T. (1992)前川啓治他編『創られた伝統』紀伊国屋書店
- 細見和之著(1999)『アイデンティティ/他者性』岩波書店
- 飯尾要(1999)「『場』と社会システム」大阪経大論集・第50巻第4号 pp.27-58.
- 池田謙一・村田光二(1991)『こころと社会 認知心理学への招待』東京大学出版会
- 今田高俊編(2000)『日本の階層システム 5 社会階層のポストモダン』東京大学出版会
- 今田高俊(1989)『社会階層と政治』東京大学出版会
- 糸川精一(1983)『イベント企画入門』日本機関紙出版センター
- 伊藤亜人(1987)「よさこい祭り、中国、韓国の祭りとの比較」季刊人類学 pp.18-23
- 経済企画庁編(1974)『国民生活白書』大蔵省印刷局

- 経済企画庁編(2000)『国民生活白書』大蔵省印刷局
- 経済企画庁国民生活局編(2000)『国民生活選好度調査』大蔵省印刷局
- 北川泰斗(1996)『舞台だーYOSAKOIソーラン祭り』高知新聞社
- 北の生活文庫企画編集会議編(1995)『まつりと民俗芸能』北海道新聞社
- 小松和彦(1997)「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編『祭りとイベント』小学館
- 厚生省/監(2000)『厚生白書』ぎょうせい
- 倉林正次(1975)『祭りの構造 饗宴と神事』NHK ブックス
- 牧野丹奈子(1999)「自己組織化経営における『場』のとらえ方」桃山学院大学経済経営論集 Vol.41 - 1・2 pp.43-80.
- マンハイム,K.& シェーラー,M.(1973)秋元律朗・田中清助訳『現代社会学大系第8巻 知識社会学』青木書店
- 真野俊和(2001)『日本の祭りを読み解く』吉川弘文館
- マズロー,A.H.(1987)小口忠彦訳『改訂新版 人間性の心理学』産能大学出版部
- (1973)上田吉一訳『人間性の最高価値』誠信書房
- (1972)佐藤三郎,佐藤全弘訳『創造的人間』誠信書房
- 望月照彦(1977)『マチノロジー - 街の文化学』創世紀
- 森雅人(1999)「たった一人が仕掛けた祭り」都市問題第90巻第8号 pp.39-51.
- 森田三郎(1990)『祭りの文化人類学』世界思想社
- (1999)「視点としての祭りーよさこい系祭りのにぎわいー」アルテ第15巻第3号 通巻206号 秋増刊号 pp.5-7.
- 中西新太郎(2000)「縁辺化される若者たち」『世界』5月号 pp.87-93.
- 二瓶長記(1986)『まつりイノベーション』ぎょうせい
- 二瓶長記(1990)『イベントからのまちづくり』ぎょうせい
- 日本イベント産業振興協会編(1993)『イベント・イノベーション イベント白書'93』通商産業調査会
- (2000)『イベント白書2000』通商産業調査会
- 日本生活学会(2000)『生活学第二十四冊 祝祭の一〇〇年』ドメス出版
- 西川一廉・森下高治・北川睦彦他(2001)『仕事とライフ・スタイルの心理学』福村出版
- 西村美東士(2001)「若者の居場所 行政が「つくる」教育的意図は何か」兵庫県自治研修所『研修』No218
- 野田邦弘(2001)『イベント創造の時代』丸善
- 野中郁次郎・竹内弘高(1996)梅本勝博訳『知識創造企業』東洋経済新報社
- 岡本祐子(1997)『中年からのアイデンティティ発達の心理学』ナカニシヤ出版
- 大野道夫(1986)「ボランティア青年の特性とその意識変化」『日本教育社会学会第38

- 回大会発表要旨記録』 pp.144-145.
- 大澤真幸(1996)『社会学のすすめ』筑摩書房
- 小沢一仁(2000)「自己理解・アイデンティティ・居場所」東京工芸大学工学部紀要 Vol.23 No.2 pp.94-106.
- レヴィン,K.(1956)猪俣佐登留訳『社会科学における場の理論』誠信書房
- 三本松政之(2001)「都市におけるコミュニティの再生」地域福祉研究 No.29 pp.1-7.
- 坂井素思(1999)「社会的知識について - 規則知と政策知 - 」放送大学研究年報 Vol.17 pp.1-25.
- サントリー不易流行研究所(1997)『時代の気分・世代の気分』日本放送出版協会
- 佐々木英和(2001)「ケータイ・インターネット時代の自己実現」田中治彦編『子供・若者の居場所の構想』学陽書房
- 白倉幸男(2000)「ライフスタイルと生活満足」今田高俊編『日本の階層システム5』 pp.151-180.
- 総理府(1998)『国民生活に関する世論調査』大蔵省印刷局
- 杉山尚子・島宗理・佐藤方哉他(1998)『行動分析学入門』産業図書
- 砂田良一(1979)「自己像との関係から見た自我同一性」教育心理学研究 27, pp215-220
- 高塚雄介(2001)「心理学から見た「居」場所」田中治彦編『子供・若者の居場所の構想』学陽書房
- 田中治彦編(2001)『居場所の構想』学陽書房
- 田中豊治(1999)組織科学「分権型社会におけるまちづくり協同システムの開発」 pp.33-47.
- 鎧幹八郎訳(1990)『アイデンティティの心理学』講談社現代新書
- 徳安彰(1999)「中間単位のシステム論的考察」社会経済システム NO.18 pp.78-83.
- 塚本学・福田アジオ編(1993)『村の文化』吉川弘文館
- 鶴見俊輔・小林和夫(1988)『イベントの作り方』晶文堂
- 内田忠賢(1993)「地域イベントの社会と空間」高知大学教育学部研究報告書第2部第47号 pp.1-14.
- 上田吉一(1988)『人間の完成 - マズロー心理学研究 - 』誠信書房
- 上野千鶴子(1994)『近代家族の成立と終焉』岩波書店
- 梅棹忠夫(1981)『わたしの生きがい論 人生に目的があるか』講談社
- 矢島妙子(2000)「「よさこい祭り」の地域的展開」常民文化第23号抜刷
- (2000)「祭り「よさこい」の誕生」現代風俗学研究第6号 2000 pp.27-34.
- 米山俊直(1986)『都市と祭りの人類学』河出書房新社
- (1998)「都市祭礼と地域社会の活性化」三色旗 No.601 pp.18-23.
- 吉永宏(1999)『響きあう市民たち』新曜社
- 山崎彰(1999)「自己実現獲得に関する発達的研究()」広島大学教育学部紀要 第一

部 48 pp.183-191.

—— (2000)「自己実現の程度と精神的健康との関連」広島大学教育学部紀要 第三
部 第49号 pp.329-337.